

王位継承者なる少女カイウラニに拾五萬弗の償金を給與す可しと明記す。然るに米國に於ては此時偶々大統領交替の期に逼りしが女王黨の策士ニューマン並びに王族少女カイウラニ等が相前後して米國に赴き政府反對黨の間に遊説せるより新大統領クリーヴランドは其三月四日を以て就職するに先ちて既に大に之が爲に動かされ三月九日米布合併條約を元老院より撤回す。間もなく布哇事情觀察の爲め陸軍大佐ブラントを派遣ししにブラントのホノルルに着するや直ちに政廳の上に掲げたる米國々旗を撤し尋でスチーヴンスに代りて公使となる。米國大統領クリーヴランドはブラント公使の報告に重を置き布哇新政府の設立を以て米國前公使スチーヴンスの不正なる干渉の結果なりと認めブラント歸國後新公使ウキリスを派遣し女王復位の事を圖らしむ。二月一八日に至り前女王リリオカラニは漸く復位の後改革黨に對して大赦を行ふ可きを承諾せしかば米國公使は翌日大統領ドールを訪ひて米國政府が女王復位に意あるを告げしも布哇政府斷然之を拒絶す。時に米國に於てもクリーヴランドの政策を攻撃するものありクリーヴランドも亦曖昧の間に女王王位回復の方針を中止す。

茲に於て布哇國民は翌西紀一八九四年七月四日を以て假政府を廢して共和政府を建て大統領に行政權を委ね上下兩院を置きて立法權を行使せしむ。大統領の任期は六箇年にしてドール兩院の選舉によりて其職に就く。然れども王政黨土人黨の反抗的運動陰謀は未だ屈伏せず唯米國軍艦のホノルル港に常泊せるが故に之を畏懼して敢て事を起さざりしも同年九月に至り米艦の本國に歸るや土人黨王政黨は大に欣辨して謀叛の元氣は忽ちに勃興し來る。然るに西紀一八九五年一月叛徒の陰謀發覺し一場の小争鬪を生じし後一月七日、八日の兩日を以て叛徒は潰散し其巨魁ウキルコックス等は同月一四日を以て或は自首投降し或は捕縛に就き審問の結果前女王リリオカラニの此陰謀に干與せるの事實明白となる。此審問は一月一七日を以て開始せしが一週間餘にして完了し二月二三日に至りて悉く宣告を受く。かくて布哇に於ける王政回復の希望は全く絶え其共和政府の基礎と能力とは始めて列國の知る所となれり。而も布哇國民の希望は之を米國に合併するにあり故に西紀一八九七年マッキンレイのクリーヴランドに代りて米國大統領となるや再び交渉を開始し翌西紀一八九八年七月七日米國國會の決議成り同

年八月一二日を以て布哇列島は正式に米國に兼併せられ爾來テルトロ！オヴ・布哇と稱す。

第八節 米國の比律賓列島征服

布哇列島を兼併すると殆ど同時に米國の新に征服せるは比律賓列島なり。布哇列島の總面積は我四國にだも及ばずと雖も比律賓列島の總面積は二十九萬六千八百八十二方軒にして我本土四國九州を合併せるものよりもなほ大なり。且つ其地亞細亞大陸に近きを以て同列島征服以後の米國は優に東亞の一強國たるに至れり。抑も比律賓列島の西班牙の治下にあるや土人は絶えず叛亂を企てしが固より列島の獨立を圖るの實力あるにあらず其叛亂は一起一仆暫くも止まざりしと雖も殊に注意するに足るものなし。但し西紀第十九世紀の後半に至りて起れる一二の叛徒は純粹の土人を以て組織されしものにあらず。即ち西紀一八七二年博士ジョセフ・ブルゴスが首領となりてカヅィターに起せる叛亂の如きは列島に於て行政事務に容喙し常に専横を極めし僧侶に對する不平に基きしものにして其勢頗る

猖獗一度カヅィターの兵庫を奪ひしが忽ちにして平定に歸す。此前後より西班牙本國に於て志を得ざるもの即ちカルロス黨を始めとして共和黨社會黨等に屬するもの漸を以て列島に移住し馬尼刺政廳反對の氣炎漸く高しかつて西紀一八九六年の夏に至りて叛徒の計畫大に熟し將に日ならずして事を舉げんとす。尤も叛徒中單に白人を敵視せるのみなる土人と共和國を建設せんと欲する不平家の二派ありしは明白なる事實なり。共和主義者は香港に運動の本部を置き劃策大に力む。時に將軍ブランコ列島の總督たり八月中旬叛徒馬尼刺攻撃の準備中なりとの密報を得急に援兵をカヅィターより召集して郭外に於て之を破る。叛徒の數二三千人其半數を組成せるタガル族義勇兵が戦半にして歸順せるが爲に事遂に破れしなり。然れども其後各地に於て叛徒に響應して起るものあり西班牙政府會てキューバ島に於て戦功を奏ししボラギーヤを以て總督となす。然るにボラギーヤは兵力の不足を訴へしかば更にプリモド・リエラを以て之に代ふ。新總督は援兵を得ずして叛徒を平定するの難きを知りて其領袖を買収するの方針を執る事となし且つ多少の改善を行政の上に加へしを以て西紀一八九七年の終に於ては叛徒は

全く其跡を斂めしが如し。
然るに是より先西紀一八九五年一月より同じく西班牙領なる北米大陸に近き西印度のキューバ島に於て叛亂起り西紀一八九七年の末に至り將軍ブランコは、キューバ總督に任せられ自治案を以て赴任せしも叛徒は容易に抵抗を止めず且つ米國人民の侵略主義を好むものは半世紀以來幾度かキューバ島の兼併を圖りし事あるを以て今や島民をして純粹の獨立を得せしめざれば已まざらんとし陰に陽に運動せるを以て爲に米西兩國間に葛藤を起し西紀一八九八年二月一六日米艦メイン號がハヅアナ港内に於て爆發せるや遂に兩國開戦の勢を激成するに至れり比律賓列島の不平黨は本國政府の困厄甚しきを見て同年春再び叛旗を擧げしかば新任總督アウガスタは百方之が鎮撫に努めしも本國より援軍を得る能はず従て功を奏するによしなし米西戦役開始し英國政府の中立を宣言せるに當りて米國海軍中將ゼオルジデュエーは巡洋艦オリズムピア號以下七隻の艦隊を率ゐて恰も香港にあり四月二五日同港を解纜し馬尼刺灣に向ふ蓋し同灣に碇泊せる海軍中將モントジョーの西國艦隊を破り以て米國太平洋岸攻撃の危険を除くと

共に比律賓列島と西班牙本國との交通を阻げんが爲なりデュエーの艦隊は四月三〇日の夜を以て目的地に達し翌五月一日拂曉を以てカヅィターの砲臺とモントジョーの艦隊とに向て砲撃を開始す西艦奮戦至らざる處なかりしも惜い哉砲手の技倆遠く米艦に及ばず旗艦レイナクリヌチナ號先づ沈没し其他六隻の軍艦も相次で同一の不幸に遭ふ午後零時半に至り交戦終結し白旗カヅィター兵庫の上に樹つ西艦死者三百人乃至四百人にして傷者は之に倍す而してデュエー中將は一兵をも損せずして敵の艦隊を全滅す實に海戦史上未曾有の事たり次で五月四日カヅィターの海軍根據地も亦米艦の爲に占領せらる報米國に達すデュエー戦功を以て特に海軍大將に昇進す。

デュエーはかくの如くにして容易に馬尼刺の死命を制するを得しと雖も未だ比律賓列島全部を征服するに足るの兵力を有せず故に華盛頓政府は直ちに同列島に軍隊並びに軍需品を送るの準備に着手し五月一六日陸軍中將エズリーメリックを以て比律賓列島の軍務知事に任じ三萬の遠征軍を派遣するに決す其第一回の遠征隊が同月二三日を以て桑港を出帆し翌月三〇日を以てカヅィターに着し

しを始として米軍は陸續として目的地に向ひ七月二五日メリット將軍も亦カグ
イターに至る。此間比律賓列島殊に呂宋内地に於ける叛徒は益々猖獗を極め征討の
西班牙兵は續々敗軍して馬尼刺の城寨内に退却す。初め西紀一八九六年の叛亂に
際し叛徒の領袖にアギナルドなるものあり年齒僅に三十に達ししに過ぎざるも
能く衆望を一身に收めしが西班牙政府の交渉に應じて抵抗を止め總督と相約す
る所あり他の同志と共に一度香港に赴く。然るにデュエー艦隊のマニラ灣攻撃の
舉あるや之に従ひて歸國し叛徒に推されて其首領となり六月一二日に至りて列
島の獨立を宣言し二三日選まれて大統領兼大元帥となり首府をマロロスに定め
七月二一日内閣を組織し歐洲列國に向て新共和國の承認を求む。形勢斯の如くな
りしを以て列島の總督ドン・パンソリヲテウガスタは既に六月八日に於て本國政府
に電報を發して曰く援兵來らずんば到底馬尼刺を維持する事難しと。比律賓列島
の運命は其危き事實に業卵の如しと云ふ可し。

然れども此際西班牙軍は叛徒鎮壓に付き意外の邊より援助を得んとせり即ち獨
逸の海軍中將デイトロツヒは其艦隊を率ゐて馬尼刺灣に來りデュエーの艦隊に

向て好意を表せず七月初旬叛徒が呂宋島内スービッグ灣口なるイールグランド
を占領せんとするやデイトロツヒ中將は獨逸は叛徒の交戦權を認めずと稱しス
ービッグ在住の西班牙人を保護するは人道の義務なりと唱へて之に干渉せんと
す。デュエー乃ち其艦隊を分派してイールグランドを奪ひ以て叛徒を援く。思ふに
デュエーとアギナルドとの間に比律賓列島を獨立國となし米國の保護の下に立
たしむるの約ありしと云ふもの必ずしも無根の事實にあらざる可し。七月二九日
米軍はカグイターを出發して馬尼刺に向ひ三一日マラテの附近に於て西軍の攻
撃を受けしが而も西軍は却て莫大の損害を受け米軍は死者九人傷者約五十人を
出ししに過ぎず。八月七日デュエー、メリットの兩將は書を西軍に與へて馬尼刺の
引渡を求めしが西軍應ぜず。時に米、西の本國に於ては既に媾和の議起り同月一二
日米國々務卿デーと駐米佛國大使カンボンとの間に豫定和約六條の調印成るに
至りしが其報未だ比律賓列島に達せざるに兩將は更に最後の要求を西軍に提し
其回答なきを見て八月一三日午前九時三十分海陸力を併せて馬尼刺市に向て攻
撃を開始し交戦二時間の後之に克つ而も米軍の損する所陸上に於て死者十二人

傷者四十人内外を出ししのみ。列島の總督アウガスタは是より先獨逸艦隊司令長官デートリックの援を假りカイゼリン・アウグスタ號に搭じて遁れしと云ふ。同年一二月一〇日巴里に於て米、西、葡和條約の調印成り。西班牙は米國に向て軍費を賠償せざりしが故に比律賓列島の主權を壹千貳百萬弗の廉價を以て米國に賣却し又海軍根據地としてマリアナ列島中のグアム島をも割讓す。次で米國は拾萬弗を以て比律賓列島の南に位置せるカガヤン並にヌエボエスピノーサ西紀一八九九年二月六日米國上院巴里條約を批准す。アギナルド以下比律賓列島の獨立を以て自任せる所謂叛徒等は米國政府が列島を屬領視せんとするの意志あるを知り此主權の移轉を見て大に喜ばず。初め西米間に休戰の約成るや叛徒は敢て之に顧慮する所なく西軍と交戦を繼續し西紀一八九八年九月中にはアルバイ州を除き呂宋全島を略し一月にはバナイ島の首府なるイロイロ市の郭外を奪ひ勢に乗じて同市を攻めしかば一二月二四日西軍のライオス將軍遂に叛徒に降る。一二月二九日叛徒は又新に内閣を組織し飽くまで列島の獨立を維持せんとす。翌年一月二〇日の頃モロロスに集會せる比律賓共和國の國會は大統領アギナルドに對し何時にても米國に向て宣戰するの權を與

ふ。米軍は馬尼刺占領の後新任軍務知事オーチス將軍の指揮に歸ししが此年二月四日の夜に入りて始めて比律賓の叛徒と衝突を起す。以來戦闘暫くも中止せず三月三十一日米軍マロロスを占領せしかばアギナルド首府をサンフェルナンドに移し其後米軍の進むに従ひ數之を移し一月一〇日よりバヨムボン^{バヨムボンの}を以て首府となす。一〇月一日アギナルド、オーチスに向て交渉を試みしも比律賓共和國獨立の議を固守せしが故に談判不調に歸せしと云ふ。同年末に至り米軍の比律賓にあるもの六萬五千人以上に上る。其後西紀一九〇一年三月下旬アギナルド米軍に捕へられ、同年七月四日の米國獨立節に於て民政總督タフト其職に就きしも未だ叛徒は全く平定せるにわらず。但しズールの梭里檀は西紀一八九九年八月中を以て米將ベーツと一條約を締結し其條約は米國上院の批准を経たる後一二月一三日に至りて發表せらる。其重なる箇條は梭里檀の米國の宗主權を認めしと米國政府の梭里檀の權利格式を承認し宗教の自由を許可せし事等にあり。比律賓領有の事確定すると共に米國は益眼を東洋に注ぎ其結果としてニカラガ^{ニカラガ}ヲ運河開鑿の議起る。蓋し此運河を開通する時は大に東部諸州と東洋との海上交

通を迅速ならしむ可きを以てなり。然れども同地方の運河に就きては米國は既に西紀一八五〇年四月一九日のクレイトンブルワ條約によりて英國と共に互に決して之を獨占せざる可きを約せり。故に西紀一九〇〇年二月五日米國々務卿へイは英國大使ボンスフォート卿と一條約を締結し米國は運河の開鑿管理權を得たり。但し運河を以て中立となすは素より言ふを待たず。然るに此條約は米國上院の批准を経る能はず。茲に於て兩國全權は西紀一九〇一年十一月一八日を以て更に條約を締結しこの新條約は翌月一六日米國上院の批准する處となれり。されどニカラグッ運河は未だ起工されざるなり。尤も南洋連絡運河開鑿の事は有名なる蘇士運河の設計者佛人ドレセップの計畫によりて既に西紀一八八一年に於てバナマ運河會社の設立を見しが工事容易ならずして一旦中止し其後之を繼續するものなり。今なほ工事中なり。而して是亦既に米人の管理に歸せしが故に米國はニカラグッ運河を棄ててバナマ運河を取らんとするが如し。そは孰れにもせよ南洋交通の捷路は早晚米國の資力によりて開通を見るの日あらむ。

第十章 第十九世紀末に於ける東洋の形勢

(西紀一八八八—西紀一九〇〇)

第一節 帕米爾境界問題

最近十有餘年間に於ける東洋の政變は實に一二にして止まらず殊に日清戰役以後に於ては東洋の天地は世界列強活劇の一大舞臺となり幾多の技藝を演奏する事となれり。但し日清戰役の顛末は既に第八章に詳述せるが故に本章に於ては其前後に跨れる中亞、南亞の政變と其以後に於ける東亞の政變とを叙して第十九世紀末に於ける東洋の形勢を明にし以て『東邦近世史』の筆を結ぶ可し。而して本節に於ては先づ帕米爾境界問題を叙述し併せて中亞方面に於ける英露最近の關係を明にせむ。

帕米爾高原は支那、布哈爾、阿富汗、斯坦三國の交界點に位し海拔一萬三千呎の高さを有するが故に『世界の屋背』の稱あり。土地不毛にして人口稀薄一見も取る可き所なきが如し。而も其三國の交界點たるは即ち其政治上に重きをなす所以に

して從來名義上帕米爾の主權を握れる數罕國の露領となるや支那、阿富汗の兩帝國は哈薩克の侵略を緩めんが爲に機先を制して其領土を擴張せんとせり。即ち清兵は喀什噶爾、葉爾羌より前進して葱嶺の高地サリクル(塞勒庫爾)の峽谷に幾多の卡倫を設置して境界を擴げ、阿富汗帝アブダルラアマン汗は西紀一八八一年巴達克山に克ち更に勝に乗じて西紀一八八五年ローシャン、什克南地方の大食族を征す。同地方の大食族は久しく事實に於て獨立國を成し首府をバルビヤンデシ(カラバル、パンジ)に定めシアワンギ汗、アブダルヒーム汗、アスフ、ハラ汗三世相繼ぎて之に君臨す。其盛時にありては東方カラクルに至るまで帕米爾の大部分を領有し常に税關をカラクル湖畔に置きしと云ふ。什克南の國王アスフ、ハラ汗は巴達克山の國王が其王族と姻親の關係を有せしより互に親密の交際を保ちしが唇亡びて齒寒く、阿富汗帝の兵を受くるに及び一度放罕に遁れしも甘言以てカプールに誘はれ一族を始めとして五百人の大食族と共に生理の刑に行はる。但しアスフ、ハラ汗の子アブダルガス汗は今なほカプールにありと而して英露兩國は既に第五章第五節に述べしが如く西紀一八七二三年の交渉に於て漠然サリクル以西に於ける

境界を協定せるまゝにしてサリクル以東に就きては一の規定なく、其後西紀一八八七年の阿富汗北境境界劃定に關する協商を締結せる際も一言の帕米爾地方に及ぶなし。かくの如くにして遂に西紀一八八九年に至りて兩國の衝突を起し、帕米爾境界問題は始めて世上の注意を喚起する事となれり。

英露兩國帕米爾探檢の沿革を尋ぬるに英人ジョン・ウッドは既に西紀一八三八年に於てサリクルを發見し之をギクトリア湖と命名せしが西紀一八七六年スコベレンフ等が帕米爾に赴きしより以後は露人の同地方に遠征を試むるもの亦少からず。而も其政治上の結果を惹起するに至りしは西紀一八八八年に於ける陸軍大佐グロムチエウスキーの遠征なり。露國政府が同大佐に此探檢を命ぜり表面の理由は學術上の研究を遂げしむるが爲なりと稱するも其實際は英領印度攻撃に際し帕米爾高原が用兵上幾何の價值あるや否之を視察せしむるが爲なりし事疑ふ可らず。然るに大佐グロムチエウスキーは翌西紀一八八九年一〇月二三日帕米爾地方探檢中カイアン・アクサイに於て英國守備兵に會ひ遠征を中止して北歸す。蓋し英領印度政府は此年大尉ヤング・ハスパン(揚哈思班)少佐カムバラントに帕

米爾出張を命じ以て露人の南下に備へしを以てなり露國は優勢なる兵力を用ゐて阿富汗兵支那兵を高原より驅逐し以て帕米爾に對する要求を貫徹せんと欲し西紀一八九一年大佐ヨノフに一千の哈薩克兵を與へて遠征を試みしむ支那兵は直ちに同地方より撤退せしかば大佐ヨノフはムルハブ(ムルガビ)堡を築きて根據地と爲し更に南進して同年八月中旬當時恰も單身小帕米爾旅行中の大尉ヤングハスバントに向ひボザイガムバスより退却せん事を求め此と同時に中尉デニキソンにも同一の要求を爲し從來同地方に獸獵を事とせる阿富汗人の反對を受けしにも拘らず暫らく此『世界の屋背』を占領す印度の廓爾喀兵の一隊は此報に接するや否衝突の地に向て出發せしが大佐ヨノフは之を聞き退却し翌西紀一八九二年二月露國政府は大佐の行動を否認し其政府の意志にあらざるを辯ず然るに大佐ヨノフは間もなく前進して再び前年の占領地域を收めしが爲西紀一八九二年七月二四日ソマタシ(蘇滿卡倫)に於て阿富汗人と衝突を起し其守備隊十五人を悉く殺す其詳細は事變の後數週間に於て同地に赴きし英人ダンモア卿の記事によりて知る可し茲に於て英國政府は再び露國の帕米爾占領に向て抗議す

る所あり大佐ヨノフは復た退却せしが西紀一八九三年露兵は更に侵略を試みて清露間の境界を定め西紀一八九四年の協商を以て清國はラングクル帕米爾とアクスー河附近の地とを露國に割く以後哈薩克兵又サリクルの西境なるアクタシに駐屯す然れども此年ヤイムスに於て哈薩克兵と阿富汗人との間に小戦あり英露間の境界は未だ確定せざりしが西紀一八九五年英領印度西北境上に叛亂起るに際し英國は殊に迅速に境界問題を處分するの必要を感じ大に露國に向て讓歩する所あり同年三月一日帕米爾地方兩國勢力範圍に關する協商の調印成る此協商は五箇條より成りサリクル(ギクトリア湖)以東清領に至るまでの境界線を豫定し之を以て兩國勢力範圍を分つ事となし且つヒンヅークリッシュ山脈と同境界線の中間に於ける地は是を阿富汗領となし英國に於て決して之を兼併せざる可きを規定すかくて此協商の規定に従ひ英國は印度中部騎兵司令官ゼラールド將軍を露國はフェルガナ知事バヅァロシユヴェニコスキ將軍を境界劃定委員長に任命し兩國の委員は同年七月二〇日を以て相會し實地を踏査せる上九月一二日に至りて同境界を劃定し了る或は曰く此問題の容易に落着せるは露國が帕米

爾地方の大兵を行ふに適せず印度侵略上無用の地たる事を覺りしが爲なりと夫れ或は然らむ。

前項に述べたる西紀一八七二三年の英露協約はサリクル以西クツチャ河オクサス河の會點以東に於ける巴達克山と其屬領瓦罕とを以てカブール君主の領土なりと規定し其後一の變更をも見ざりしが西紀一八九六年に至り露國は帕米爾の西南に向て其占領區域を擴げ此協約は遂に修正せらる。即ち露國は巧に達爾瓦斯國人のオクサス河右岸に住するものと左岸に住するものとの間に軋轢を起さしめ此を機として布哈爾阿富汗兩國の間に交渉を開かしめ其結果遂に一條約の締結となり英國政府も亦之を承認す。此秘密條約の細目は未だ公にされずと雖もオクサス河の右岸に於ける阿富汗領土を悉く布哈爾即ち露國に與へ其報酬として露國が同河の左岸に於ける達爾瓦斯領土に對する要求を放棄し之を阿富汗帝に交付せる事明なり。露國は又此年チャログ並びにランガルキシユトに堡寨を築き翌年瑪魯噶朗よりムルハブに至るの間に國道を通ず。現今露領帕米爾は帕米爾クーダラアの二郡より成りカラクル、ムルガビ、ラングクル、アクタシ、アリカアは帕米

爾郡に屬しキルキズ族重に之に住しサレズ、クーダラアはクーダラア郡に屬し大食族重に之に住す。其人口總計二千人内外にして一年の經費十萬留を要すと云ふ。而してローシヤン、什克南、瓦罕地方の民政は之を布哈爾汗に委任せしが露帝ニコラス二世戴冠式の時に際し露國陸軍大臣は露都に於て同汗に此恩典を與ふるの報酬として五箇年以内にオクサス河左岸の人民を煽動して阿富汗帝に反對せしむ可きを誓約せしめしとぞ。因に記す現今キジル、ラバット、キラウンヂの兩地にも哈薩克兵の駐屯するあり。

中亞に於ける英露對立の近情を明ならしめんと欲せば露國の後裏海鐵道に就きて一言する所なかる可らず。露國が同鐵道の敷設に着手せるは西紀一八八〇年の事にして恰もテッケ族征討の際なり。即ち兵站監アネンコフ將軍はスコベレフ將軍の命を受けて同年六月裏海海岸マイカエル湖の附近よりバミに至るの鐵道を敷設し翌年之をキジル、アルザットに延長す。次で西紀一八八六年に至り更に之をメルヅに延長し同地に於て線路を二條に分岐し一は東北に向ひて前年合併せる土耳其斯坦省の各地と聯絡を通じ一は直ちに南下して阿富汗境上に進ま

んとす。而してアネンコフ將軍は先づ前者より着手しメルヅより布哈爾を経て撒馬爾干に至るの線路は西紀一八八八年五月二七日亞歷山三世の誕生日を以て開通式を舉行す。是より先裏海の線路起點をウーザンアダに移す同地より撒馬爾干まで總計一千四百二十五杆其工事の困難なるに比して其經費の廉に(約我金二千五百萬圓其竣功の速なりしは各國人の驚嘆する所なり。西紀一八九五年撒馬爾干より霍爾土に至り同地より分れて塔什干並びに安集延に至るの線路落成し翌西紀一八九六年再び裏海海岸の線路起點をクラスノヴォドスクに移す。次にメルヅよりマルガブ河に沿ひ南下してヘラットを距る僅に五十杆なるクシュクに達する約二百三十五杆の線路は西紀一八九七年の終に至りて彌工事に着手し最初三年間に竣功の豫定なりしを大に工事を急ぎ翌西紀一八九八年一二月を以て竣功を告ぐ。茲に於てか用兵上露國は英國に對して多大の利便を有するに至る。而して西紀一九〇〇年一月一日英軍が南阿に於て苦戰の當時阿富汗の形勢不穩なりと唱へて露國の派遣せる若干の軍隊クシュクに到着せしを以て世人皆其ヘラット占領の野心あるにあらざるやを疑へり。然れども露國の目的はヘラットに

あらずして波斯にあり。蓋し阿富汗帝アブデルラアマン汗は深く英國が其獨立を尊重せるを徳とすると共に露國の反覆信なきを知るが故に決して拱手して其侵略を看過せざる可く而も帝は優に露兵に當るの兵力を有するを以てなり。西紀一九〇一年九月二八日アブデルラアマン汗崩殂せしも長子ハビバルラ汗 Habibullah 無事即位し露國は干涉の口實を得ざりき。但し是後年の事に屬するを以て更に上文に接して當時の形勢を述べんに露國はクシュクに向けて所謂動員の試験を行ふの後間もなく露國銀行は波斯政府の公債募集に應じ五朱利付にて貳千貳百五拾萬圓を貸與して同國現在の外債を皆濟するの資に充てしめ英國の勢力範圍なるファルシスタン及び波斯灣諸港を除き國內各地の關稅を以て之が抵當となさしむ。而して英國は西紀一八九二年を以て波斯政府の募集せる六朱利付金貨公債の債主たりしが故に之が爲に一大打撃を受けしものなりと云はざる可らず。殊に其波斯政府をして將來露國の承諾なき時は決して外國債を募集せずと誓約せしめしに於てをや。且又是と同時に得たりと稱する露領カウカサス省のジュルファよりタブリスを経て波斯灣のバンダアアバス港に至る鐵道敷設權の如き英國

に取りて輕々看過す可らざる處たり。初め西紀一八八七年頃テエラン駐劄露國公使ドルゴロキー公は波斯先帝ナズルエッチンに逼りて波斯國內鐵道敷設の優先權を得五箇年以内に之に着手す可き事と定めしが其後鐵道計畫の競争甚しきを加へしより西紀一八九〇年新任露國公使は本來文明の利器を好まざる波斯先帝と十年間波斯鐵道敷設中止の協約をなし而して波斯先帝は又當時英國公使に貴國の承諾なくんば決して波斯南部に鐵道敷設を許可せざる可しとの誓約を與へしが波斯今帝は果して此誓約を破りしや否や。今帝は先帝の長子にしてムザッファエッチン・マザと稱し西紀一八九六年五月一日先帝の暗殺さるるや四十歳にして初めて即位せるなり。

第二節 緬甸戰役後の英領印度

西紀一八八八年ランズダウン侯、ダッファリン・エンド、阿華侯に代り、西紀一八九四年エルデン・エン・ドキンカアダイン伯、ランズダウン侯に代り、西紀一八九八年の二月に至りカアズン・ネツケッドルヌトン卿、エルデン卿に代り緬甸戰役終結の後

現今に至るまで英領印度の太守實に三人を換ふ。此間英領印度と外國との關係に就きて將た又其領内の事件に就きて史家の輕々看過する能はざるもの少からず。但し帕米爾境界問題に關する露國との交渉事件は既に其顛末を前節に叙述せるを以て本節に於ては外交問題にありては拉達克占領、シッキム保護、並びに雲南、緬甸間に於ける境界の紛議に關する英、清兩國の交渉に就きて略叙し内治問題にありては西北境上戰役の本末を詳叙し終りに臨みて最近の大飢饉に就きて一言し而して暹羅問題に關する英、佛兩國交渉の記事は之を次節に譲らむ。

カシユミル市の東方に當れるインダス江上流の峽谷を拉達克と云ふ。此地は元西藏領なりしがシク族の勢を北印度に振ふや西紀一八三九年カシユミルより東に向ひて之を掠めしよりカシユミル領となる。而も爾來西藏カシユミル兩國數邊疆の争を起し軋轢絶えず西紀一八八八年に至りて兩國の邊民又争を起せしを以て英國は新に清國と境界を議し遂に拉達克の主權を公然清國より得て其局を結ぶ時に西紀一八九〇年なり。シッキムは西藏の南、ネポールの東に位せるヒマラヤ山脈中の一小國にして西紀一八一四年以來印度政府と交際を開始し西紀一八六一

年の條約を以て益其關係を親密になす。然るにシッキム王西藏人の煽動によりて條約に違反し要塞一個を築造ししかば西紀一八八八年一月印度政府は西藏に至るの道路修築を名として一千の兵士をシッキムに派遣す。シッキム王西藏兵の援助を待みて敢て屈せず故に印度政府は更に三月を以て二千の兵をビードンに集め直ちにリング城を奪ふ。二〇日西藏兵北歸し翌日英軍城寨を破壊す。而も其後西藏兵再びシッキムに入り五月二三日並びに九月二五日の兩回大佐グラハム之を邀へ撃ちて大勝を博ししが時に英清兩國政府の間に同地方の事に關し協商締結の議起りしより印度政府大佐グラハムの進軍を停め之を召還す。かくて西紀一八八九年三月印度太守と清國使節即ち西藏の昂邦との間に條約の締結成り清國シッキムに對する英國の保護權を承認す。次で英國女皇陛下が西紀一八九〇年八月一七日を以て批准せる條約は英國政府に與ふるにシッキムの内治外交を監督するの權を以てす。而して英國の爲に清國が西藏のヤタンを開きしは西紀一八九三年のシッキム西藏條約の規定に基く。

緬甸は元來安南朝鮮の如く清國の屬國なりしを以て英國が之を兼併せるや清國

との間に外交上の紛議を惹起せしも西紀一八八六年七月二四日光緒一二、北京に於て締結せられたる英清協商に於て清國は英國の侵略を承認す。故に此協商は其實質に於ては佛國が砲烟彈雨の間に相見えし後初めて得たる處よりも更に大なりと云はざる可らず。而も之を得るや全く樽俎折衝の間に於てせしを思はば英國の成功は特に其光彩を加ふ。但し英國は清國の面目を保たしむるが爲に協商の第一條に於て從來緬甸政府十年一貢の例に倣ひ必ず緬甸人を使節として十年毎に北京に進貢せしむ可き事を約し又當時恰も印度より西藏の首府拉薩に向けて使節派遣の議ありしが暫く之を延期すべき事を約す。然るに西紀一八九一年に至り英兵雲南省の騰越鎮に近づき野人と互に相殺せしかば茲に同方面に於ける英清の境界を劃定するの必要を生じ兩國政府の間に幾多の交渉を重ねし後西紀一八九四年三月一日光緒二〇、正二四。英國外務大臣ローズベリー伯と駐英清國公使薛福成とは倫敦に於て緬甸支那境界約定及通商條約二十條に調印す。新訂滇緬條約と云ふは即ち同一物なり。此條約は北緯二十五度三十五分東經九十八度十四分の尖高山より起りて南に向ひ更に東に向ひて北緯二十一度二十七分東經一百度十二分

の涓公江岸に至るの境界を規定し又其第五條に於て英國は従前清緬兩國の命を奉ぜる孟連、江洪の二部落に對する要求を放棄すると共に清國が恣に之を他國に割讓する時は抗議す可きを明記す。其後西紀一八九七年二月四日^{光緒二十三年}駐清英國公使マクドナルドは李鴻章と北京に於て滇緬條約續議附款を訂結して西紀一八九四年の條約に修正を加へしも境界の問題に關しては敢て根本的變更を試みしにわらず而して英清兩國の委員は今なほ實地踏査中なり。

帕米爾境界問題の英露の間に將に葛藤を起さんとするに當り英清兩國の間にも亦同地方の領有權に關し紛議を起せり。初めランズダウン卿の印度太守となるや間もなく從來カシユミルの屬領たりしハンザ並びにナガル兩國の保護權を印度政府に收む。然るに同地方は一にカンズト(坎巨提)と稱し即ち「新疆讞略」の乾盛特「一統輿地圖」の喀楚特なり。而してハンザの國王は毎歲沙金一兩五錢を北京朝廷に貢するを以て例となせしかば西紀一八九一年の冬印度政府が陸軍大佐ヅーランドをしてハンザを征せしめ國王サフダアリの逃るるに際して新に其義兄弟なるモハメッドナジムを立つるや駐英清國公使薛福成は英國政府に向

て抗議を試みしもカンズト地方は遂に純然たるカシユミル屬領となりモハメッドナジムは能く印度政府の指令を奉ず。薛福成は又阿富汗兵がソマタシ(蘇滿卡倫)を守るを聞きて英國政府に抗議せる事あり。蓋し彼のヤングハズバンドが西紀一八九一年に目睹せる所に據るもアリチュル河がエシルクル湖に注ぐの地に近く其右岸に漢滿、土耳其三體の文字を以て記せる碑文ありて乾隆二四年^{西紀一七五九}清兵が和卓木を追撃して同地に至りしを明にし又其左岸には數年前に清兵の築造せる堡壘の遺址ありしと云へば清國の政權が數ソマタシ地方に及びし事あるは明瞭なる事實なるを以てなり。而も薛福成が英國政府に向て照會せしは西紀一八九二年の事にして同年ソマタシに於て露兵と阿富汗兵との間に衝突を起せしは既に前節に説けるが如し。

ハンザの西に當りてサトラルの回教國あり人口約八萬を有し西紀一八七八年の條約によりてカシユミルの屬國となり西紀一八九二年までは部族統御の術に長ぜるアマン、ナル、マルクなるもの君主 Mehtar としてサトラル本部並にヤシンを併せ領す。然るに此年八月下旬其十七子を遺して老病を以て歿するや第二子アフツ

アルマルク直ちに兵庫を占領して時に出でてヤシンにありし長兄ニザム・アルマルクを國外に追ふ。印度政府乃ちアフツアルマルクを公認してチトラルの君主となす。幾もなくして前君主の義弟シルアフツアルなるもの起りて之に抵抗す。シルアフツアルは初め追放の刑に處せられ久しく阿富汗斯坦に流寓せしが本國の變亂を聞きて同志の徒と共にドラア越によりてチトラルに入りしなり。アフツアルマルク兵を部署して之を邀へしが敵の銃丸に中りて戦死せしかば人民シルアフツアルを奉じて君主となす。ニザルマルク此時恰もギルギイトにあり當時同地に駐在せる大佐グーランドと謀りて英軍の援を借りシルアフツアルを撃ちて之を阿富汗斯坦に走らしチトラルの君主となる。然るに西紀一八九五年の初其弟アミルマルクなるものチトラルの南隣諸部族間に勢力を有せるウムラ汗の教唆を受けてニザムアルマルクを暗殺し英國政府に向てチトラル國主たらん事を求む。英國政府可かず、茲に於てチトラル人民甚しく蜂起しシルアフツアルも阿富汗斯坦より歸りてウムラ汗を助け相共に印度政府の同地に置ける兵營を圍む。英軍直ちに進みてチトラルに向ひ七週間の合圍に堪へし兵營を

救ふ事を得しが偶々英國政府に同地方放棄の議起り將に其實行を見んとす。然るに自由黨内閣仆れて保守黨内閣之に代りしを以て政府の議一變しチトラルを保持するに決しベシワルより直ちに道路を開通し途上マラカンド越竝びにチャクダラに守備兵を置く。其後二年間同地方暫く無事なり。而も印度陸軍司令長官ロバツ卿は所謂前進主義を取るを以てベシワル、チトラル間に軍道を設くるや撫育主義によりて其中間に住するスワット族、アフリヂ族の同意を求むる事を爲さず爲に其款心を失へるの状あり。而して是より先西紀一八九三年スア・モーチア・グーランドは印度政府を代表して阿富汗帝と協商を訂結し英阿の境界を定めしが不幸にしてモーマンド族の領土を兩國の間に分割す。既にしてモーマンド族の間に争闘あり阿富汗帝之に干渉して兵をミッターイ峽谷に出し外營を占領す。同地はグーランドの協商によりて英國の所有に歸せるを以て西紀一八九七年一月英國政府は其代表者をして阿富汗帝に注意せしむ。同年五月阿富汗帝は恰も他意なきが如くミッターイ峽谷占領の兵を召還せしがモーマンド族、スワット族、アフリヂ族等相響應して起り各地を守備せる英軍を圍む。

此年六月一〇日ワヂリスタン地方の部族が英軍を襲ひしを始として七月の末にはスワット族等マラカンドの堡壘を抜かんとするに至れり。但しモーマンド族がマラカンドの攻撃に加はらんとして同地に赴きし時は英軍の既にスワット族を撃退せる後なりしと云ふ。スワット族を煽動せるは『狂ムールラ』にしてモーマンド族を教唆せるはハッダムールラなり。ムールラとは僧侶の義なり。

西紀一八九七年の孟夏に於て阿富汗境上六百哩の間に互れる部族は悉く起て印度政府に叛きアフリヂ族の如きは激戦數回遂にカイバル越全部を占領す。此年九月英軍の戦地にあるもの三萬七千人に上りしも戦線の延長大なるを以て英國政府は更に援兵を派遣し且つ陸軍大將スアキルリヤム・ロックハートを起して征討の任に當らしむ。此月英軍ハッダムールラの村落を焼夷し一〇月二〇日ダグニに於てアフリヂ族と激戦を試む。蘇國出生の喇叭卒 Fingaler なるもの兩脚に銃傷を負ふも屈せず岩に攀ぎて Cock of the North を吹奏せるは此時の事なり。二月初旬將軍ロックハート、アフリヂ族の領土に入りて媾和の條件を公布す。アフリヂ族の同盟なるオラクザイ族は其條件を容れ後裝銃五百挺を獻じて降を乞ひしがアフリ

ヂ族は之に應ぜず將軍ウエストマコットの軍を襲ひて大に之を苦む。既にしてザッカケル族又起りて英軍を悩ます。茲に於て印度政府の政策を攻撃するの聲漸く英國の政治社會に起りしも將軍ロバーツは叛徒蜂起の原因を以て政府が終始前進政策によりて行動せざるが爲なりと辯じ境上に於ける英軍の數を増加して六萬に達せしむ。かくて西紀一八九八年四月一日に至りてザッカケル族は降服し同年一〇月下旬アフリヂ族は其使節をベシワールに遣し印度政府の提議に應ず。但し印度政府はアフリヂ族をしてランデコタル並びにジャムラッドの城寨を修築して舊態に復せしめ又カイバル越に對する要求を放棄せしめしも其他の領土は從來の如く自治に任す事と定めしなり。而して西北境上の全く平和の狀態に復するに至りしはカアズン・オヴ・ケッドル・ストン卿赴任後の事なりとなす。西紀一九〇

九日バングア州中の一部を割き之に阿富汗境上諸部族の地を加へて新に「西北境上州」を設く。

最後に簡単に西紀一八九七年以來の飢饉の事を記さむ。同年六月一二日アッサム地方に大地震あり幾多の人畜を害せしと雖も之を飢饉の災害に比すれば眞に九牛の一毛のみ。西紀一八九六年の雨季に際して天一滴の雨をも下さずために翌年

六月に至りて政府の救助を受くるもの四百五十萬人に上り被害の面積我日本全部の三倍半即ち五十七萬方哩強に達す然るに更に之に加ふるに西紀一八九六年九月の頃より孟買地方にペスト發生し西紀一八九九年九月二日に至るの間之が爲に死するもの實に二十七萬人と稱す天何ぞ印度に禍するの甚しきや蓋し天然の恩恵大なると共に又天然の災禍大なるは萬有の法律に於て免るる能はざる所なるか其後飢饉の勢更に衰へず西紀一九〇〇年には總面積七十萬方哩の地に災害を及ぼし政府の救助を受くるもの六百二十萬人の上に出でしと云ふ。

第三節 湄公河上境界問題

印度支那東部諸邦侵略の事業完成するや佛國は更に其眼を中部に注ぎ湄公河上境界問題なるものを捉へ來りて暹羅王國と葛藤を生じ其餘波延きて巴里倫敦兩政府の間に交渉を重ねる事となれり抑も佛國と暹羅との間に實際の端を發らざしは遠くルイ十四世の治世にあり時に暹羅國王フナナライ希臘人フォルコンを宰相に任じて銳意内治の改革に努力しつつありしが西紀一六八〇年九月ルイ十

四世の使節デランデブローのワンツール號に搭じて湄南河口に着するを聞くや大に之を喜び其請を容れて通商を許可す間もなく暹羅國の使節は佛京に赴き兩國の交際益親密を加へしもフォルコンの暗殺に遭ひフナナライの殞するに及びて交際全く絶ゆ西紀第十九世紀の中葉に至りて佛國の牧師にバルゴラーなるものあり久しく暹羅に在住し西紀一八五一年其兄ナンクローに代りて王位に即きしモンカットムンカトは四紀一八五一年四月三日を以て祖にヒヤンクフハモンカットヒヤンクフハモンカット之に代り翌年マハモンカット即位すとあり今「暹羅紀要」の信用を博し遂に暹羅をして英佛諸國と開港通商の條約を締結して之を實行するに至らしむ英國の使節ボウリングが暹羅に於て條約を結びしは西紀一八五五年四月一八日の事にして佛暹條約の成りしは其翌西紀一八五六年八月一六日なり米暹條約も亦此年を以て成るモンカット王は少年の時(西紀一八二四年)庶兄の爲に位を避けて佛寺に入り僧侶たる事二十六年の久しきに彌りしを以て善く民間の事情に通じ賢明を以て聞ゆ即位の初從來暹羅に於ては商工業は一切貴族の特權に屬せしが主として此惡弊を改めしが如き以て其一斑を窺ふ可し西紀一八六八年一〇月一日王殞す長

子チュラロンコン一世位を嗣ぐ是即ち現今の暹羅國王なり。
チュラロンコン一世は西紀一八五三年九月二日の生誕なり故に西紀一八九三年を以て四十歳の賀儀を舉行せしに其盛宴の宿醉未だ醒めざるに忽ちにして佛國との間に大紛議を起す。湄公河上に於ける境界問題と稱するもの即ち是なり。佛國は單に印度支那東部の海岸地方を占領せるに満足せず更に其内地を經略せんと欲せしが西紀一八八八年より西紀一八九一年に互り佛人バグリの一行が普く湄公河の流域を探検せるより初めて其左岸占領の方針を定めバグりを擧げて暹羅國都盤谷駐在の總領事と爲す。バグリの任地に至るや直ちに暹羅政府に向て談判の緒を開く而して其理由とする所は湄公河左岸の地は曾て安南の領土たりしと云ふにあり。暹羅政府は乃ち之に答へて曰く西紀一七七九年暹羅兵進で湄公河東に入り安南人柬埔寨人を驅逐せるより以來同地方に住居せる老樁人並びにシャン族は曾て貢獻を怠らず。前年佛國陸軍大尉ガルニエーが同地方を探検せる時暹羅兵營に於て懇切なる待遇を受けしはガルニエー手簡に明記する所ならずやと。暹羅政府は前年新に聘用して政府の顧問となせる白耳義の前内閣大臣にし

て歐洲公法學者の泰斗たるローランジャクマン西紀一九〇二年一月歿をして専ら湄公河上境界問題を調査せしめ西紀一八九三年三月一四日に至り佛國に照會すらく湄公河左岸北緯十三度より十九度に互るの間に於て幅三十哩以上の中立地を設定し以て佛、暹兩國の領土を離隔せむと佛國政府斷然之を拒絶せしが故に暹羅政府は更に歐洲局外國の仲裁々々に委任せむ事を提議せしも佛國公使之を肯んぜず。當時の公使は即ち前年の總領事バグリなり。

然れども暹羅政府も亦陰に英國の後援ある可きを思ひて強硬の態度を取り或は老樁人を使喚して安南人に抵抗せしめ或は兵隊を増發して湄公河左岸の堡寨に據りスントレン及びコン島の要地を守らしめ以て佛國に對して敵意を表す。然るに佛國の輿論は既に一定して又動す可らず英國の干涉又其機會の乘ず可きものあらざりしを如何せむ。西紀一八九三年二月四日佛國殖民次官デルカッセは代議院に臨みて湄公河左岸の地は當然我印度支那の領土内なりと喝破して大喝采を博し次で三月一日外務大臣デジュールは公言して曰く殖民省と本省との協議成りしを以て將に着々として佛國の權利を回復せんとす。而して最も侵略政策殖

民政策に焦慮せるドラネッサン恰も佛領印度支那總督の任にあり四月一日安南駐在の佛國理事官バスタール陸軍大尉トローロ一等と軍隊を率ゐて涓公河涯に進入し暹羅兵を驅逐してコン島並びにスントレンを占領す又他の一軍は北方の山脈を越えンパンヒエン河の流域を西進しケマラットの對岸より悉く暹羅兵を撃退し涓公河の左岸を一掃す六月三日の電報に曰く五月二六日カゲン河畔のカムムオン堡なる暹羅兵は佛將リュースの命に應じて撤退し了れりと十日の後更に電報を傳ふ曰くカムムオン堡よりフーテン堡並びにノンカイ堡に至るの間暹羅兵は皆其占領せる城堡を撤して涓公河を渡りて右岸に退けりと茲に於て下老樞地方悉く佛國の有に歸す

時に暹羅王の諸弟は出でて國境の軍隊指揮の任に當りしが其バツタクにあるものはスントレンの敗報に接するや直ちに八百の兵を派遣して佛軍を襲はしむ佛軍乘隙敵せず大尉トローロ捕虜となる又其ノンカイにあるものは六月一三日を以て佛軍に向て逆襲を試み佛の軍曹一人(グロイヤラン)安南兵十三人之に死す佛國公使バツイは本國政府の訓令を得て暹羅政府に對してトローロの放免を

求め若し其承諾を得ずんば直ちに盤谷を去る可しと談判ししかば暹羅政府大に恐れ之を承諾す然れどもバツイ公使が七月一〇日を以て書を暹羅外務大臣デブウ・ソングセに送り巡洋艦インコンヌタン號砲艦コメード號の涓南河^な溯航を知照し水先案内を得ん事を求むるや暹羅政府は百方言を設けて之を拒まんとす西紀一八五六年の佛暹條約第十五條に曰く佛國軍艦はバクナム港に碇泊するを得可し但し盤谷に赴かんとする時は須らく之が知照をなす可しと佛國政府は此規定に従ひて行動せるのみ然るに七月一三日に至り海軍少將ドリシユリョーがバクナム港より溯航せんとするや暹羅の砲臺は之に抵抗して茲に一場の戦闘を起せしが佛艦は士卒の中に僅少の死傷者を出せしのみにして最後の勝利を得盤谷に至り佛國公使館の側に碇泊す其乗員僅に二百二十人に過ぎざりしも暹羅國政府狼狽爲す所を知らず佛國公使が市街を砲撃するの意なきを公言するに及びて始めて愁眉を開きしと云ふ蓋し英國政府が局外中立の態度を取りしより盤谷政府の目算頗る齟齬するに至りしは明白の事實なり

佛國政府は七月一八日を以て暹羅政府に提出す可き最後通牒の條件を議定し翌

日外務大臣デグエル代議院に出でて外交政策の大旨を演説す。七月二〇日バグイ公使は本國政府の電訓を得て六箇條の要求を照會せしに暹羅政府は其第一條湄公河左岸全部割讓の件を除くの外は悉く各條を承諾し二日の後に至りて北緯十八度以南の湄公河左岸を割讓せん事を提言す。バグイ公使斷然之を拒絶し二十五日盤谷を去りてコンシチャン島に赴き本國政府の訓令を待つ。二十八日海軍中將ユシナシ柴根より暹羅灣に赴き湄南河口封鎖の命を下す。翌日暹羅外務大臣デヴウナングセ和蘭總領事キユーンを介して書をバグイに送り悉く六箇條の要求を承諾す可きを以て封鎖を解かん事を要求す。茲に於てバグイは新に要求の條件を増加し八月一日暹羅政府が悉く之を容るるに及び始めて封鎖を解かしめ三日七日に至りて盤谷に歸る。是と同時に海軍中將ユシナシは暹羅政府が六箇條の要求條件を遂行し了る迄之が擔保としてチャンタプーン港を占領し安南兵一小隊及び砲艦一隻を以て之を守る。而して是より先七月八日佛國政府は湄公河上境界問題を處理せしむるが爲會て交趾支那知事の職に就き東邦の形勢に通ぜる代議士ルミイルドヴィレルを以て特派全權大使となし暹羅に赴かしめしが此時既に新嘉坡に

來着す。

ヴィレル大使は八月一六日を以て盤谷に着し先づ地方の離宮に避暑せる國王の還幸を請求せる後始めて國書を奉呈し次に内閣顧問ジャクマンをして談判の席に列せしめざらん事を要求す。暹羅政府は八月二二日銀貨を以て償金貳百五十萬法を佛國大使に渡し他の五拾萬法は柴根府に於て印度支那銀行に渡し以て之を完済せしも條約の締結は容易に之を肯んぜず。ヴィレル大使は乃ち九月二九日を以て最後通牒を提出し四十八時間以内を限りて承諾せざれば公使館の國旗を卸して盤谷府を退去す可しと脅迫せしかば暹羅政府は唯々諾々として之に屈從し一〇月一日を以て此要求を承諾し同月三日兩國の全權條約に調印す。其規定は之を七月二〇日の最後通牒に比する時は大に佛國の利益を増加せるものにして今其要領を掲ぐれば暹羅は第一湄公河左岸全土並びに同河上の諸島を一切佛國に割讓し第二大湖並びに湄公河上に兵船を浮べざるを約し第三拔坦邦、シェンリ、グ(アン)ヨール(兩州)並びに湄公河右岸二十五軒約我六里十三町以内の地に於て要塞兵營を設けざる可きを約し第四同地方に於て佛國臣民に旅行通商の自由を許

可し、第五、コーラット及びミアンナムに於て佛國の領事館設置を承諾しし事等なりとす。而してチャンタブーン港占領の一事はなほ舊の如し翌年一月二〇日佛國議院は該條約を批准しかく、涓公河左岸十萬方哩の地は其主權者を換ゆる事となれり。然れども涓公河上境界問題は未だ全く完了せるにはあらず。即ち次に同問題に關する英佛二國の交渉に就きて記述する所あらむ。

下老樾地方の主權移轉に關しては英國政府は素より之を馬耳東風視するを得しと雖も上老樾地方即ちリャンプラパン以北にありては大に其事情を異にするものあり。英國は既に西紀一八九二年に於て上緬甸の東方に當れるシャン族部落に對する保護權を確めしが其部落の涓公河の兩岸に跨れるものあるより佛國の其左岸全部占領に對して抗議を提出す。かくて駐佛大使ダッフワリン卿は佛國外務大臣デグネルと商議を開き西紀一八九三年七月三十一日涓公河上流に幅員五十哩内外の中立地域を設定し以て兩國の衝突を未發に防ぐの議を決す。次で同年一月二五日を以て中立地域の位置を確定して涓公河左右兩岸に跨がる所の方域キヤンキエン部落及び河の北岸ミアンナン部落より東はリャンプラパン州に至

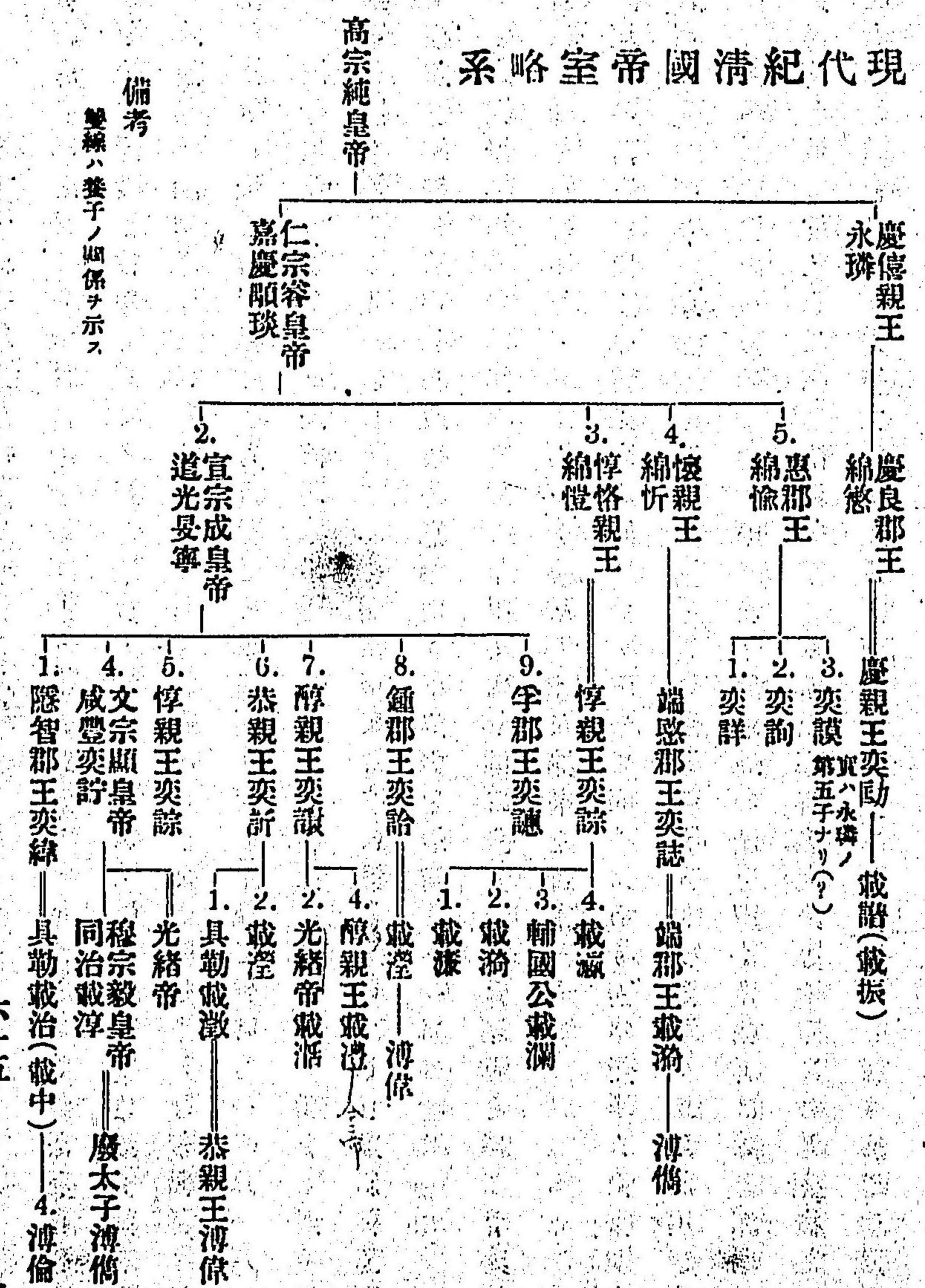
り西は涓公河を界とする事となし佛國は前暹羅公使バグイを英國は同地方の形勢に通ぜるスコットを劃界委員に任じて實地を踏査せしめ翌年の冬に至りて漸く之を劃定す。然るに其後佛國が其地の涓公河右岸二十五軒以内にあるを利してリャンプラパンの上流百二十哩に位せる此中立地域内なるキヤンコンに堡塞を建設せるより英國の物議大に沸騰し再び倫敦、巴里兩政府の間に交渉を生じ其結果西紀一八九六年一月一五日の英佛協商と成る。此協商は英國外相ソールスベリ侯と佛國公使ドクローセルとの間に締結されしものにして其規定に従ひ中立地域のモンシンは以後佛國の有と爲り涓公河を以て英佛領土の分界線と定む。又此協商により英佛兩國は暹羅の中部即ち涓南河、ベツチャブリー河、ベトソオー河等の流域を以て中立地帯となし互に之に向て軍隊を派遣し又之に對して特權を獲取せざる可きを約す。而して其東西に位せる地帯は之を以て英佛兩國の勢力範圍となし各行動の自由を留保す。西部の英國勢力範圍はサルウキーン河東の地並に馬來半島北部一帶にして東部の佛國勢力範圍は拔坦邦、アンコール、コーラット諸州を包含す。其他佛國は又涓公河右岸二十五軒以内の行政事務に干渉するの

權利をも得たり面積六十三萬三千方杆人口一千二百萬人八千の常備兵と數隻の砲艦とを以て之を守り而して英佛兩國領土の中間に介在す暹羅の前途も亦危いかな。

第四節 日清戰役後の清國

本節に於て最初に叙述せざる可らざるは光緒二十一年八月一に蜂起せる甘肅回匪の顛末なり何となれば甘肅循化の回徒が事を起せるは此年三四月の交日清の交戦未だ全く終結を告げざる時にあればなり次で河州の逆回馬永琳等機に乗じて亂を作し海城の逆賊復た衆を聚め官吏を害す是より礮伯巴燕戎格各地の回匪風を聞きて響應し全省騒動す蓋し甘肅は漢回雜居しその争執の事あるや辨理平を持する事難きを以て漢民回民の奸賄なる者又事に遭ひ風を生じ端を藉りて互に煽し猜疑既に久しく積怨愈深く遂に燎原の禍一發して止む可からざるに至れるなり之を以て日清戰役の結果となすは決して正解にあらず五月喀什噶爾提督董福祥を派し師を統べて征討の任に當らしむ陝甘總督楊昌濬陝西固原提督雷正綰

現代紀清國皇室略系



備考
雙線ハ養子ノ關係ヲ示ス

等征服の功を奏する能はざるを以て此年七月二十五日^一均しく之に革職留任を命じ速に逆徒を掃蕩し以て前過を贖はしむ。八月十九日^二雲南巡撫魏光燾を以て陝西巡撫胡聘之に代らしめ師を督して甘肅に入り征討に勤めしむ。董福祥は各營を總統し最も力を得たり。九月馳せて狄道州に至り數戰て皆勝ち一〇月一八日^三遂に河州の圍を解き逆回馬永琳等を誅す。乃ち循化の米拉溝一帶より進みて西寧を抜く。是より先一〇月四日^四楊昌濬に許すに骸骨を以てし甘肅新疆巡撫陶模陝甘總督を署理し布政使饒應祺代りて巡撫を署理す。十一月二十七日^五董福祥を以て甘肅提督に轉補し特に命じて甘肅勇軍を總統し出征諸將を節制せしむ。董福祥の西寧に向ふや魏光燾は既に兵を率ゐて同地にあり西寧辦事大臣奎順と會商し先づ西寧の東努關の驛賊を清め遂に逆首韓文秀等を誅し一二月北川を渡平し進みて多巴を攻め進りに大通縣及喇嘛城の圍を解く。董福祥は隊を派して大通河を渡り達板山に出て陶模の派する所の副將焦大聚等の軍に會し先後して北大通の賊を進攻し光緒二二年正月上下五莊に克ち北大通城を復す。多巴の賊其

會馬大撲を斬り餘衆湘軍に詣りて降を乞ふ。三月一二日^六雷正綰を解職し同一五日^七甘肅西寧鎮總兵鄂增を以て陝西固原提督に補す。此時巴燕戎格の逆回馬成林等米拉溝の逆回治諸麻と勾事し回徒を糾合し南川に接及す。逆回劉四復等水峽より青海の柴達木に竄出し關外に蔓延す。董福祥等各馬隊を派して追撃し奎順は又青海の蒙古兵番兵に命を下し力を合せて討伐せしめ次第に諸賊巢を陥ぬれ馬成林治諸麻等を捕へて之を誅す。北京政府諭令して鄂增の一軍を以て進みて州に紮營せしめ竝に饒應祺に電令し道員潘效蘇の各軍を派し嚴に安西旋洋玉門南山各隘口を塞ぎ分赴截擊して七月劉四復を羅卜淖小東州の和兒昂地方に擒す。茲に於て關の内外及び青海全境一律に肅清す。逆回亂を構へてより其徒數十萬人を嘯聚し地方數千清里を蹂躪す。一〇月五日^八清帝上諭を發し董福祥奎順陶模饒應祺魏光燾等の功を賞し且つ戰亂地方善後撫恤を命ず。日清の戦役も終結し甘肅の回匪も斯の如く容易に平定せしと雖も爾來年と共に國歩益艱難の域に莅り。蓋し清國が一旦日本に割讓せる遼東祖先の地を回復する事を得しは露佛獨三國干涉の爲なるを以て當然之に向て謝する所なかる可ら

ず而して又清國は償金其他必要なる經費を支辨するが爲新に三億兩の外債を募集せざる可らず其結果埃及の覆轍を踐むに至らん事智者を待たずして明なり露國大藏大臣ドゥイッテは明敏達識の士なり好機逸す可らずとなし自ら保證の地位に立ち佛國銀行家を説きて壹億兩壹千五百八拾貳萬磅の支那外債に應ぜしむ。次で露國經濟上の勢力を清國に扶植するが爲に露清銀行條例案を西伯利鐵道委員會に提出し同條例は西紀一八九五年二月二二日光緒二十一年一月十七日を以て露帝の勅裁を経たり露清銀行とは即ち華俄道勝銀行なるものにして露國帝室に縁故ある侯爵ウフトムスキ一等子の發起人たり其定款第十四條に清國內に於て租稅上納金の取扱を引受くる事國庫に關係ある業務を營み並びに清國政府の認可を経て地方の貨幣を鑄造し清國政府の募集したる公債の利子を支拂ひ清國內に於て鐵道を敷設し電線を架設する免許を得る事と規定せるを見れば以て銀行設立の真意の那邊に存するかを知るに足らむ然れども北京駐劄露國公使カシニ伯の深く相結託せる李鴻章は下の關係約を締結して歸國せる以來皇帝の逆鱗に觸れて屏居せるより露國は直ちに干渉の報酬を得る能はず。

初め清國政府は光緒二〇年一〇月一六日西紀一八九九年九月十一日湖北布政使王之春に命じて表面露國の先帝を弔し新帝の即位を賀するが爲なりと稱して露國に赴き以て日清戰役に對して露帝の干渉を求めしめ王之春は同年一二月一〇日西紀一八九九年十一月十一日上海を發して露都に至りしが其目的を達するを得ず去て佛國に赴く王之春の著『使俄草』に據るに其巴里滯在中頻りに南洋大臣張之洞と電信を以て交通せるが如し張之洞は佛國に頼りて以て李鴻章と露國とに當らんと欲せしにあらざるかを免に角カシニ伯は李鴻章をして再び要路に立たしむるの必要を感じ西紀一八九六年五月二六日光緒二十二年四月二十四日露國新帝ニコラス二世の戴冠式に際し清廷が王之春をして之に參列せしめんとせしに反對し強て李鴻章を起して全權大使と爲さしむ李鴻章の露國にあるや露帝は外務大臣ロバノフ公を以て全權委員となし而して世人の注目を避くるが爲大藏大臣ドゥイッテをしてカシニ伯の立案に基きて代りて之と談判せしめ戴冠式の前夜遂に莫斯科に於て議定書に調印す北京政府は此議定書に對して極力反對せしもカシニ伯人をして西太后を説き露國と親むの利益を以てその心を動かせしかば此年九月三〇日西紀一八九六年八月二日清帝遂に之を批

准す世に所謂カシニ(喀希尼)秘密條約と稱するもの即ち是なり露國が如何に此條約に於て三國聯合干涉に對し過大の報酬を得しかは李鴻章が歸國の後此議定書に調印せしを以て懲罰せられしを見るも推測するに難からず蓋し臣下の分に背きて禁國に入りしと云ふは表面の理由たるに過ぎず而して幸にもカシニ一秘密條約は同年一〇月二八日の『北清日報』紙上に現はれしを以て聊か其要領を記述せむ。

露國がカシニ一秘密條約に據りて得たる主要の報酬は滿洲鐵道の敷設權なり其第一條に曰く露國西伯利鐵道將に落成せんとするを以て清國は浦鹽斯德より環春を経て吉林府に又西伯利の或る市府に於ける停車場より愛理齊々哈爾伯都訥を経て吉林府に其線路を延長する事を許すと抑も西伯利鐵道の第五區黑龍江線なるものは幅員陝隘なる同江並びにシルカ河の谿谷を通過するの計畫にして工事の困難一方ならず爲に露國は本書の緒言に於て一言せしが如く最後に之を敷設するの豫定なりしが今や工事の容易なる滿洲線を以て黑龍江線に代ふるに至りしかば巨額の經費を節減すると共に西伯利鐵道の延長に於て無慮五百十四露

里を短縮するを得たり間もなく露國は西紀一八九六年八月二七日^{一七}清國政府と華俄銀行との結びたる契約に基くと稱して中國東方鐵路公司の設立を認可し滿洲鐵道敷設の事に従はしむ但し同公司の株主は即ち華俄銀行なりとす而して實地測量の結果露國の敷設中なる線路は後貝加爾線の敷^{カシニ}起り滿洲に入りて海拉爾齊々哈爾伯都訥吉林府寧古塔を経て南烏蘇里線のニコリヌク(雙城子)に至り全延長千九百二十露里也。^{東清鐵道は西紀一八九七年八月一六日その外露國がこの密約に於て得たる處を見るに露國或は清國に代りて山海關より奉天府を経て吉林府に至るの鐵道を敷設する事ある可し第三條清國の計畫せる奉天府並びに山海關より旅順口大連灣に至るの鐵道は露國式に依る可し第四條清國は決して旅順口大連灣を他國に割讓せず而して有事の日には露國の海陸軍を兩港に集合する事を許す可し第十條等の規定あり東三省發祥の他又漸く滿洲人の領土たる能はざらんとす而して其第九條は規定して曰く露國は東亞に不凍港を有せざるが故に清國は十五箇年間膠州灣を貸與す可しと。}

北京駐劄佛國公使ヂエラールは李鴻章と關係なく露國に先ちて干涉の報酬を得

しが如し。即ち同公使は西紀一八九五年六月二十九日光緒二十一年五月廿七日北京に於て三個の條約に調印せしが其第一は陸路通商に關し其第二は疆界の改訂に關し素より露國の獲得せる利益に比する時は云ふに足らざるも清國の讓與せる處又少しとなさず。即ち或は新に雲南の思茅市を開き或は陸路關稅の稅率を輕減し或は雲南廣西廣東三省の採鑛に關する優先權を與へ或は安南鐵道を清領内に延長する事を許し或は湄公河東江洪の一部を割讓せし等は實に其重なるものなり。倫敦政府は佛國が南清に於て特殊の利益を得たるを見て大に之を喜ばず。巴里政府に向て交渉する所あり。西紀一八九六年一月二十五日の英佛協商第四條に於て規定すらく佛國が西紀一八九五年の條約を以て南清に對して得たる利益權利は英國も亦之に浴するを得可しと英國は又清國が西紀一八九四年光緒二十年の條約に背きて江洪の一部を佛國に割讓せるを見て大に之を怒り清國に向て交渉する所あり。西紀一八九七年二月四日第二節參看英國公使マクドナルドは李鴻章と前年の條約を修正して聊か前年規定の境界を變更すると共に原約に於て英國領事駐在地と定めたる盤允を騰越(モーメイン)に改め將來鐵道を以て雲南と緬甸とを連絡すべき事を約し

更に清國は特別條項を以て西江航路の開放と同江上なる廣西の梧州府廣東の三水市等の開港を約す。此西江航路の開放により最初に佛國の得たる利益は殆ど有名無實となりしかば此年佛國は清國をして一は東京境上なる老開ラウカイより雲南省城に一は諒山龍州間の計畫線を延長して南寧府に鐵道を敷設するの權利を讓與せしむ。其他西紀一八九六年光緒二十二年の末佛國は清佛戰役の際海軍中將クルールベールの破壞せる福州船政局再興の事業を擔任するの契約を締結し現今同船政局の實權は全く佛人の掌裡にあり。

露佛兩國並に英國等皆清國に交渉して斯くの如く利益を占めしに拘らず此時に至るまで干涉三國の一なる獨逸は僅に天津其他の開港場に於て專管居留地を得しのみ。獨逸は果して之に甘んず可き乎否や。西紀一八九七年一月三日光緒二十三年十一月三日獨逸海軍少將デートリックは突然三隻の軍艦を率ゐて膠州灣に赴き灣口なる青島砲臺の守將總兵章高元チヤウカウゲンに逼りて退讓せしめ直ちに之を占領し翌日膠州府城に占據す。是に先づ數日即ち一月二日光緒二十三年十一月二日の夜を以て獨逸宣教師ハンツェリハンツェリ(韓吉利)並びにニイエス能士山東省曹州府鉅野縣に於て暴民の爲に暗殺せらる。此暴民

は多く日清戦役の敗將章高元の舊部下にして山東巡撫李秉衡の除隊せるものなりと云ふ。而して此二名の宣教師は山東南部牧師監督アンツェル(安守)の徒弟にしてアンツェルは西紀一八七九年^{光緒五年}以來支那の布教に従事せるパウリア出生の高僧なり。北京駐劄獨逸公使男爵ハイキング(海靖)はデートリック少將をして膠州灣を占領せしめし後始めて北京政府に向て鉅野縣事件の談判を開き之と同時に獨逸皇帝は皇弟ハインリッヒ親王をして有力なる艦隊を率ゐて膠州灣に赴かしむ。時に獨逸は恰も海軍擴張案を議會に提出せしが之を通過せしむるに際し好個の辭柄を得たり。西紀一八九八年一月四日^{光緒二十三年十一月十四日}清國は獨逸に對して宣教師殺害教會堂破壊に對して償金を拂ふ可き事を約せし外九十九箇年間膠州灣を租與し^{租期を百箇年と規定する時は歐洲の習慣上租與を意味するを以て九十九箇年なる租借の最長期を採用せるも其實殆ど租與に等し}山東省內採鐵優先權並びに膠州灣より濟南府を経て山東省界に至る鐵道敷設權を其後即墨縣に於ける強姦兵士殺害の賠償として膠州灣より沂州を経て濟南府に至る鐵道敷設權をも讓與す。但し膠州灣租與に關する確定條約が北京に於てハイキング男爵李鴻章翁同龢の間に調印されしは三月六日^{光緒二十三年二月十四日}の事なり。『外交時報』の有賀博士は獨

逸膠州灣占領の目的を説明して獨逸は『永く東亞に於て露國の援助たる地位を繋ぎ以て露佛同盟の銳鋒を獨逸に向くる事を避けんと』し『露國の爲に口實を作るの目的を以て從來露國艦隊の碇泊所たる膠州灣を先づ占領せんと申出て露國の同意を得たるものなり』と説けり思ふに其真相を穿てるの説ならむ。露國は乃ちガシニ^{カシニ}秘密條約に基き清國より軍艦を旅順口に碇泊せしむるの許可を得西紀一八九七年一月一日^{光緒二十二年十一月一日}を以て之を列國政府に通牒す。膠州灣の事あるや北京駐劄露國代理公使バゾッフ(賈羅夫)に巴布羅福^{巴布羅福}は前年三月獨逸が英國と共に清國の第二回外債壹億兩壹千六百萬磅の募集に應ぜりより聊か不快の感を起しし際なるが故に北京政府に向て嚴談を試み遂に西紀一八九八年三月二十七日^{光緒二十三年二月二十七日}大學士李鴻章戸部侍郎張蔭桓と一^{カシニ}條約を締結す。假りに之をバゾッフ條約と呼ぶも又可ならむ。此バゾッフ條約は九箇條より成立し今其重要なる規定を擧ぐれば(第一)旅順口大連灣並びに其附近一帶の地を二十五箇年の期限を以て露國に租與せる事並びに(第二)カシニ條約に規定せる滿洲鐵道と大連灣を連絡するの鐵道並びに此新線路と牛莊間の鐵道敷設の權を露國に讓與せる事即ち

是なり。茲に於てか露國以下三國の忠告を納れ日本の清國に還付せる東洋の要地は三年ならずして事實上露國の有となり露國は其久しく熱望せる不凍港を得しのみならず浦鹽斯德よりも遙に好地位を占めたる西伯利鐵道の終點を得たり。其後旅順口をニコラウエン、大連灣をダルニーと命名し着々として之が防備を完全ならしめ次で金州廳地方をも租借區域に加へ西紀一八九九年光緒二十五年九月新に一省を設けて關東省と稱し海軍中將アレキシエフを以て同省總督兼太平洋艦隊司令長官に任ず。露國は又表面白耳義シシデケートの手を介して西紀一八九八年六月二六日光緒二十二年北京城外蘆溝橋より湖北の漢口に達する清國江北の大幹線鐵道の敷設權を得しが津沱河の南なる柳林堡に於て此大幹線より分岐し山西省太原府に至るの山西鐵道一に柳太鐵道現時正大鐵道と稱すは華俄銀行の供給せる資金を以て敷設さるる事となれり。因に云ふ佛語が英語に代りて北京外交界の用語となりしも亦此前後の事なり。

はじめハインリッヒ親王の支那に向ふや途上英國のポーツマス港に女皇を訪問し蘇丹遠征に就きて中立を守る可きを約す。故に英國は敢て獨逸の膠州灣占領に向て抗議を唱へず。然るに清國政府が第三回の外債壹億兩(壹千六百萬磅)を募集せんとするや英國公使マクドナルドは西紀一八九七年光緒二十三年の歲末に於て之に應ずると共に其條件の一として大連灣の開港を要求し以て露國の機先を制せんとししが露國公使バグロフの反對を受けて議成らず。而も日本政府が債金の支拂延期を拒みしが爲遂に外債の談成立し西紀一八九八年二月一日光緒二十三年清國は先づ揚子江畔の土地を他國に賃入、租賃若くは讓與せざる事を約し、次で内地の河川を開放する事、英清貿易の盛なる開港場の税關長は英人を用ゐる可き事、二年以内に湖南に一の開港場を設く可き事等を諾す。然れども英國たる者露國の旅順口、大連灣租借に對する適當の賠償を得ずんば満足する能はず。茲に於て清國は同年四月二日光緒二十三年日本の撤兵を埃ちて威海衛を英國に租與する事を約し更に英國公使マクドナルドと清國全權とは七月一日光緒二十三年北京に於て右に關する條約に調印す。其租與せられたる領域は劉公島及び威海衛灣内に在る各島嶼並に威海衛の濱岸に沿ひて内地十里に達する地帯を包含す。而して英國は又此條約に於て綠威東經百二十度四十分芝罘を距る事遠からざる地點より以東の海岸に於て自由に砲臺

又は兵營を築造するの權を得たり。南清に於ても又英國は此年六月九日^四。李鴻章許應麟の調印せる條約を以て香港の對岸なる九龍半島の租借區域を大に擴張して大鵬灣(マウス灣)深州灣(デープ灣)を其區域内に包含し以て下文に記す可き佛國の所得に對して權衡を得るに至れり。

獨露英の三國が斯の如く幾多の重大なる讓與を得るに際し佛國たるもの又安ぞ之を袖手傍觀するを得んや。西紀一八九八年四月五日^三。北京駐劄佛國代理公使デューバイルの談判奏效せり。同月一二日^二。清國政府が英國公使に通牒せる處に據るに當時清國の承諾せる所は^一廣州灣を貯炭場として租與する事^二東京境上より雲南府に鐵道を敷設する事^三廣東、廣西、雲南三省並に海南島を外國に割讓せざる事^四驛遞事務を總稅務司の事務より分割する時は佛人を以て之が長官となす可き事の四箇條にありしが如し。此第四項はスアロバアト・ハートの權力を殺がん爲に請求せる事項なるを以て英國の抗議を受け之が實行を見る能はず。廣州灣は廣東省の南端雷州半島の東岸にあり佛國はクールジョール提督を清國は蘇元春を委員とし租借地劃界の事に任せしめしも兩國の委員互に固く執

りて下らず。偶々四月二一日宣教師ペルトレー廣西に於て兇徒に殺されしより佛國は外務大臣アノトー在職中六月七日北海より南寧に至る鐵道敷設權を得しが其後二名の佛國士官廣州灣附近に於て殺害に遭ひ宣教師シャネー非命に仆る。茲に於てアノトーの後任デルカッセは強硬なる訓令を北京駐劄公使ビションに下し西紀一八九九年一月一五日^{光緒二五}。劃界の事全く定まる。其他の關係國に至りては日本は四月二三日^三。を以て福建不割讓の約を得しのみ五月九日^二。沙市日本領事館暴徒の爲に焼かれしも日本は清國をして償金拾萬五千兩を支拂ひ一、二の開港場に日本租界を新設せしめしのみ。翌西紀一八九九年^{光緒二五}三月三日伊太利も亦列國に倣ひ三門灣の租借を要求せしが清國斥けて之に應せず。然るに英國の得し處は上述せし威海衛の租借香港の擴張に止まらず。即ち北京ンデケート(福公司)に英、伊、シンデケートとも稱すを介して西紀一八九八年五月二八日^{光緒二四}。山西省嶺山探掘並びに同省より湖北襄陽府に至る鐵道敷設權^{是政}を露國に同鐵道を許可せるより此解釋を生じしにはあらざるを。得又英、獨、シンデケートを介して天津鎮江間の鐵道敷設權を得更に北京ンデケートは河南北部、浙江

に於ても採掘權を得しが其外に英國は獨力を以て上海南京間浦口南京の對岸信陽河南間蘇州杭州寧波間九龍廣東間等に鐵道を敷設し雲南緬甸鐵道を揚子江下流の地に延長するの許可を得たり而して英國が此年六月七日^{一四}の契約を以て滙豐銀行香港上海銀行をして山海關より牛莊に至るの鐵道を抵當として之が敷設費を清國に貸與せしめんとするや露國公使バグロフはカシニ條約を援きて清國を責め爲に英露の間確執を起し事體頗る重大なる結果を生ぜん^{一五}とせしが一〇月一二日^{一八}滙豐銀行が契約を改めて北京天津山海關の既成線を擔保とする事となりしを以て漸くにして事無きを得たり露國黨なる李鴻章が總理衙門大臣を免ぜられしは此際の事なり(九七二八^{二〇})。露國は英人キンダーが關外鐵道敷設の事に當れるを以て前年の末より數之が排斥を試みしも遂に成らず此年暮清國は英國に對して決して關外鐵道を外國に讓與せざる可きを誓約すかくて西紀一八九九年四月二八日(一六日)露都に於て露國外務大臣ムラヴィヨフ伯と英國大使スアチャルススコッドとの間に支那に關する協商成立し長城以北を露國鐵道敷設許可の範圍となし揚子江流域を英國鐵道敷設許可の範圍となす但し關外鐵道に

對する滙豐銀行の放資は之が例外たる事を明記す而して揚子江流域とは英國外務次官ブロードリックの説明によれば揚子江附近の各省並びに河南浙江二省なりと云ふ。

斯の如く列國利害の衝突益甚しからんとするを見て米國政府は未然に其平和の破裂を防止するの自家通商上の利益を保護する所以の道なるを感じ清國の門戶開放に就きて大に斡旋する所あり米國は西紀一八九八年四月一日^{光緒二四}華盛頓府に於て清國公使伍廷芳^{ウーテイフ}と美華公司米國支那開發會社の締結せる契約により湖北の漢口より湖南を経て廣東に至る所謂粵漢鐵道の敷設權を得じのみ未だ不當なる要求を清國に試みし事なし而して清國門戶開放政策は主として英國の唱道せる所にして其始めて明に之を世上に發表せしは西紀一八九八年三月上奏文討議の際に於ける外務次官カーズンの演説なりとす其後露國が大連灣(ダルニ^一港)を獨逸が膠州灣を自由港となししは實に門戶開放政策を承認せる結果なり而も米國々務卿ヘイは此政策に就きて一定の宣言を作り西紀一八九九年九月六日^{光緒二五}英佛獨露伊及び日本駐在の代表者に訓令して各其駐在國政府に照會せ

しめて之を發表するの承諾を得しかば西紀一九〇〇年三月二〇日光緒二六、更に二、二〇。在外代表者に通牒して關係國が悉く米國の提議に應じたる旨を以てし同問題茲に確定す此宣言は三項より成り(第一)決して開港場に干渉せず又勢圈内若くは租借地域に於ける他國の既得權利を阻害せざる事(第二)自由港に非ざる限は何れの邦國の勢圈内なるに拘らず其地の開港場に入市せる商品に對しては悉く現行の海關稅を賦課し其徵稅を清國政府に委任す可き事(第三)其勢圈内の港灣に出入せる他國船に對して自國船に於けるよりも過重の入港稅を賦課し又其敷設し監督せる或は其勢圈内を通過せる鐵道の營業に於て他國商人に對し自國商人に於けるよりも過重の運賃を要求せざる可き事是なり此門戶開放に關する米國政府の盡力は或は以て列國間の争鬭を調和するの力ありしならむ而も未だ以て清國人士の排外思想を緩和する能はず。

日清戰役以來清國人士は稍其内治の改革に注意せるが如し例へば光緒二三年正月元日西紀一八、九七、二、一。總稅務司マアロバート・ハートが郵便事務を開始し次で萬國郵便聯合に加盟せるが如き又光緒二四年三月江蘇の吳淞福建の富寧湖南の岳州直隸

の秦皇島を同年一二月二三日西紀一八、九七、二、二、三。廣西の南寧を自ら開港せるが如き其二班なり尤も岳州南寧の開港は曾て英國の請求せる處なるも吳淞富寧秦皇島は其列國より租借の請求を受けん事を慮り豫め之に備へしなりそは兎に角清國の進歩派をして當時着實に施設參畫せしめば其結果大に見る可きものありしならんに惜い哉康有爲一派が急激なる改革を試みしが爲改革派は素より漢人を擧げて其勢力を政府に失ふ事となれり康有爲は廣東省南海縣の儒者にして夙に清國制度一大刷新の必要を感じて變法自強の説を唱へ前後五回上奏する所あり清帝之を延見せんとし恭親王の説く所となりて之を止めしも光緒二四年四月一〇日西紀一八、九七、二、四、一〇。親王の薨ずるや間もなく四月二三日西紀一八、九七、二、四、二、三。を以て始めて詔勅を下して其國是を定め以て革新を始むる事を天下に公示し五日の後康有爲を願和園の仁壽殿に召見すかくて五月五日西紀一八、九七、二、四、五、五。八股文を以て士を取るの法を廢止せるを始として改革の詔勅紛々として雨の如く下る西太后をはじめ守舊黨殊に滿人の一輩は頗るこれを擇ばず豫め之に備ふ即ち此五月五日に於て直隸總督を交迭し漢人王文韶に代ふるに滿人榮祿を以てせるを第一着手とし七月八日西紀一八、九七、二、四、七、八。天津に於て閱兵式を行

ひて其際廢立を行はんとす。而も翁同龢^{ウモンコウ}之を察し清帝を諫めて其行を止めしむ。是より改革、守舊兩派の爭益、激甚を加へ七月二八日^一。清帝が根本的制度改革の準備として康熙、乾隆、嘉慶の例に倣ひ懋勤殿^{モウキンテン}開始の事を西太后に乞ふて拒絶さる。や改革派は遂に兵力を以て西太后一派を斥けんとし之を直隸按察使新建陸軍統領袁世凱^{ユエンセイケイ}に謀る。袁世凱密に之を滿洲派に告げしを以て遂に主客其地を換へ八月七日^二。西太后再び出でて垂簾の政を聴き變法派却てクーデターに遭ふ。康有爲^{カンユウヰ}、梁啓超^{リヤウキョウソウ}等は辛うじて身を以て脱れしも、康廣仁^{カンクワンジン}、楊深秀^{ヤウシンシュウ}、楊銳^{ヤウエイ}、林旭^{リンキョク}、劉光第^{リウクワンチ}、譚嗣同^{タンシトウ}の六人は斬罪に處せられ八月一三日李鴻章免職以來總理衙門の實權を握りし張蔭桓^{チャウインヰ}は回疆に流され途に於て刺客の殺す所となる。茲に於て入股文を復活する等悉く康有爲の變法を廢止し改革派全く屏息し榮祿北京政府に入りて裕祿^{ユク}直隸總督となり滿人悉く北清の要路を占む。是と同時に清人の排外思想急に活氣を添へしかば列國公使は各守備隊を入京せしめ以て公使館を警備す。

此際西太后が廢立の事を行ふに意ありしは八月一日^三。上諭を發して天下の名醫を召して清帝の病を診せしめん^四とせしを見るも明なり。然れども列國公使の

視聽を憚りて敢て之を斷行せず蓋し英國公使の如きは總理衙門に向て萬一皇帝崩殂の事あらんか其西歐諸國に及ぼす可き影響は頗る清國の爲に不利ならんと忠告せるを以てなり。爾來清帝は宮城禁園内に幽閉せられ有れどもなきが如し。光緒二五年一月二五日^四。西太后再び廢立を圖り先づ端郡王載漪^{ツァンイ}の子溥儀^{フイ}を以て同治帝の養子となし立てて光緒帝の皇太子となす。皇太子時に年僅に七歳なり。端郡王は道光帝の孫なるが詳細は六一五頁なる現代紀清國帝室略系を參看せよ。是より先西太后は李鴻章を商務大臣に任じて南清に派遣し次で廣州灣境界紛議の結果兩廣總督譚鍾麟^{タンチュンリン}を罷めて之に代らしめしが其他張之洞^{チャウチュウ}、劉坤一^{リウクンイチ}の兩總督を慰撫せる等豫め計畫する所ありしかば立太子の事のみは容易に行はれたり。而も其得る所は端郡王をして政治に容喙せしむるに至りし外一も見る可きなし。而して之が爲に半歳ならずして義和團匪の大難を生ずる事とはなれり。團匪の顛末は今なほ世人の記憶に新なれば本書に於ては單に之に關係せる重要なる事蹟を列擧するに止めむ。

義和團なるものは今より百年前一度山東直隸諸省に跋扈せし事あるも其後久し

く消息を聞がず。然るに西紀一八九九年^{光緒二十五年}五月、六月の交より再び山東省に起り義和拳と稱する一種の柔術を行ひ自ら迷信すらく此術に熟達する時は以て能く砲弾を避け劍戟を防ぐを得可しと。故に義和團匪一に拳匪 *Boxers* とも稱す。支那春秋日本幕末の尊王攘夷に倣ひしものか扶清滅洋なる大題目を標榜とし所在歐米の宣教師と基督教徒とに向て暴行を加へ西紀一九〇〇年^{光緒二十六年}五月には既に直隸に入りて北京の附近に至る。前年北清地方の凶作なりしとリンドル・ペストの山東に流行せしとは實に團匪の兇焰を熾ならしめし直接の原因なり。而して列國公使は多く是を以て一種の仇敵運動なりとなし留意せざりしも。西太后、端郡王をはじめ北京の排外黨が之と連絡を有ししは疑なきが如し。五月二十七日^{光緒二十六年}、團匪が前年開通せる北京保定間の鐵道を破壊するや此月三十一日^{光緒二十六年}、英、米、佛、露、伊六國の水兵將校以下四百五十六人北京に入りて公使館を護衛し翌日獨逸水兵五十名士官三名又後れて至る。然るに六月六日^{光緒二十六年}、清帝の上諭を見るに清國政府は義和團匪を討伐せんとはせずして却て之によりて排外の目的を達せんとするの色あり。時に天津、北京間の鐵道は已に破壊せられ形勢容易ならず列國公使も早く之を察し大

沽碇泊の軍艦に向て兵員の増派を求めしかば英國東洋艦隊司令長官海軍中將ス・ア・エドワード・シーモアは六月一日^{光緒二十六年}、を以て英、米、露、日、伊、奧、獨、佛八箇國の陸戰隊二千五十五人を率ゐて天津を發し行、鐵道を修繕して進みしが官兵團匪に合して前路を遮り邸坊停車場以北道路梗塞し既にして後方の連絡も亦絶ゆ。北京に於て日本公使館書記生杉山彬の董福祥の部下に殺されしは六月一日^{光緒二十六年}の事なるが同一日^{光緒二十六年}、端郡王が慶親王に代りて總理衙門の首席を占めしより排外主義全盛の時代となり同日^{光緒二十六年}、獨逸公使男爵フランク・トレルは官兵に殺され遂に同日^{光緒二十六年}、清國政府の列國に對する宣戰の布告となる。而して天津の外國居留地も亦六月十七日^{光緒二十六年}、より清兵の包圍攻撃に遭ふ。

大沽沖に碇泊せる列國軍艦の司令官は先づ大沽砲臺並に塘沽停車場を占領するに決し之が引渡を直隸總督裕祿並びに砲臺司令官に要求せしが六月十七日^{光緒二十六年}、午前零時五十分砲臺先づ艦隊に向て發砲す。茲に於て砲臺は忽ちにして陥る。六月二三日^{光緒二十六年}、援兵初めて大沽より天津に着して居留地の包圍攻撃を解き。二十六日^{光緒二十六年}、シーモア隊も亦天津に歸着せしも未だ清軍に當るに足らず。陸軍少將福島

安正の引率せる日本の援軍等來着するに及び始めて天津總攻撃を行ふ事となり七月一四日^{一六}。遂に天津城を陥る。清將聶士成^{ネチチシキ}、馬玉崑^{マヒクン}等の徒益し苦戦頗る力めしが如し。是より先七月六日^{一〇}。日本政府は英國の請求を受けて漸く一師團の兵を派遣するに決し陸軍中將男爵山口素臣之に將として七月の末を以て天津に至る。列國皆兵力を増し獨逸は更に各關係國に照會して元帥ワルデルゼー伯を北清に赴かしめ以て聯合軍總指揮官たらしめんとす。然るに元帥ワルデルゼー伯の來着せざるに先ち聯合軍は八月四日^{一七}。を以て天津を發して北京に向ひ日本軍八千人、英軍千六百人、米軍千六百人は白河の右岸を露軍三千五百人、佛軍八百人、獨逸水兵二百人、奧國水兵六十人、伊國水兵二十人は其の左岸を前進す。翌五日^{一七}。拂曉左隊は苦戦の後北倉^{ペツツ}を占領し其翌六日^{一七}。日、英、米軍の大部分は右隊に加はりて楊村^{ヤン}を占領す。茲に於て佛軍留りて楊村を守り獨逸、伊の水兵は天津に退き日、英、米露四國の軍惟り前進す。南蔡村^{ナンサイ}八、七、河西務^{カシ}八、九、馬頭^マ八、一〇、張家灣^{チヤンカワン}八、一一、通州^{ツウ}八、一二等豫定の時日を以て聯合軍の有に歸し八月一四日^{二〇}。砲戰七八時間の後日本軍は東直門、朝陽門を他の列國軍は東便門、崇文門を破壞して北京城内に入り公使

館救援の事成る。

然るに其前日を以て清帝は西太后と共に董福祥の軍隊に護衛せられて山西の太原府に向て北京を蒙塵し慶親王、端郡王等政府の大官も多く之に従ひ北京は無政府の狀を呈す。九月三日^{一八}。慶親王歸邸し李鴻章も亦清帝より媾和全權に任せられ同月二〇日^{二八}。天津に着せしが媾和の談判容易に開始せられず聯合軍の多數は冬期間北京に駐屯するの必要あり乃ち海陸交通策源地を占領するに決し九月二〇日北塘の砲臺を略せしを始とし大なる抵抗に遭はずして一〇月一日^{二八}。山海關をワルデルゼー着清後一九日^{二六}。保定府を奪ふ。茲に於て清國も亦大に顧みる所あり更に慶親王と李鴻章とを便宜行事大臣に任じ正式に列國に向て媾和を求む。而して北京に駐在せる十箇國の公使は一〇月八日以來數會議を開きて媾和の條件を討議しし末十二箇條の要求をなすに決し一の連名公書を作りて之を清國全權に交付す時に一二月二三日^{三〇}。なり。其要點は一〇月五日を以て佛國の提議せる處に異ならず即ちケットレル男、杉山書記生虐殺に對し謝罪使派遣の外元兇處罰、兵器竝に兵器製造材料輸入禁止、公使館常備護衛隊設置、大沽砲臺破壞、北京

天津間要地占領等是なり。清國全權は一二月三〇日^{九一}、直ちに大體に於て之に同意し西紀一九〇一年九月七日に至りて北京に於て列國公使との間に最終議定書の署名成れり。かくて西紀一九〇〇年一〇月二六日^{四九}以來西安府に蒙塵せる清帝と西太后とは西紀一九〇二年一月七日を以て北京に回鑾せらるる事となれり。而して皇太子は前年十一月三〇日の上諭を以て廢黜せられたり。

當初團匪事件の起るや西紀一九〇〇年七月下旬より八月上旬に亘り露國は滿洲地方の清國官民が敵對せるを口實としてブラゴヴェシチンヌクに於ては三千の支那人を黒龍江に投じ牛莊、琿春、愛琿、哈拉賓等の要地を占領せり。間もなく露國は八月二五日^{一八}の宣言を以て滿洲の秩序回復し東清鐵道保護の必要なき曉は他國の行働によりて妨げられざる限は清國の國境より其軍隊を撤退す可しと公言せしが人をして其眞意を疑はしめたり。英獨兩國が一〇月一六日^{二四}倫敦に於て締結し次で佛、伊、日、埃、露米諸國の承認せる所謂英獨協商は(第一)清國河川及び沿海諸港の自由開放並びに(第二)清國版圖の保全を約し萬一清國に於て領土上の利益を獲んとするものある時は兩國政府は自國の利益を保護するが爲に追て取る

事ある可き措置に關し豫め協議を爲す可き事を留保すと規定せしも而も獨逸に極力露國に反對するの意なく關東總督代理コロストウエツチは奉天將軍増祺に逼りて先づ密約を締結し次で露國外務大臣ラムヌドルラ伯がリヴヂアに於て駐露公使楊儒と約案を草し西紀一九〇一年三月二六日を以て之を調印せんとするに際し極力抗議を試みて其實行を見るに至らざりしめしは實に日本の當局者なりしと云ふ。然るに同年の秋に至り新任北京駐劄露國公使レッヌアは復李鴻章を要して滿洲條約を締結せんとせしが一二月七日李鴻章の遠逝せるより又果さず(李鴻章の死するや侯爵に封ぜられ文忠と諡さる)其後公使は新に慶親王、王文韶と談判を開始せしに既に西紀一九〇二年一月三〇日倫敦に於て日英協約の成るあり露國も又大に鋒鏑を收めざるを得ず同年四月八日の條約に於て十八箇月の後に於て滿洲より撤兵す可しと約せり。此條約と共に滿洲問題は一段落を告げしが如きも而も清國問題は西紀第二十世紀に於ける世界的大問題の隨一なり。

第五節 朝鮮と日露

日清交戦の初明治二七年四一八九七月下旬朝鮮政府は先づ軍國機務處を設け同月三〇日中央政府の官制を定め日本政府の組織に倣ひて一府議政八衙門内務、外務、度支、軍務、法務、農商、學務、工務を置き總理大臣以下各衙門の大臣を新任せしが制度整備するも改革の實舉らざるは既に第八章に説けるが如し、日本政府は此を以て遺憾なりとし此年一〇月一五日内務大臣伯爵井上馨を特命全權公使に任じ大島圭介に代りて京城に駐在せしむ。井上伯の京城に入るや撓まらず屈せず百方韓廷に向て忠告する所あり會て平壤陷落の際に得たる大院君の手書を證として其清軍に通ぜざるを責めて退隱せしめ又參内謁見の際苦諫して王妃をして將來政治に容れさせざる事を誓はしめ一二月一七日久しく國外に流浪せる朴泳孝、徐光範を擧げて大臣たらしむ。翌明治二八年四一八九一月七日朝鮮國王親ら社廟誓告式を行ふ誓告の條項十四其第一に清國に頼る念慮を絶ち自主獨立の基を立つる事とあるは此時始めて井上伯の言を容れて冊封使を受くる事、正朔を奉ずる事、冬至使を派する事等清國に對する服屬の關係を表する儀式を擧げて廢止す可きを約せしを以てなり。其第三に君主親政各大臣に問ひ後續宗戚に干與せしめざる事とあるも重

要なる條項なり。「東京日々新聞」紙上 其後日本は朝鮮稅政改革の資金として三百萬圓を貸與せしが三國干涉遼東還付の事ありしより朝鮮政府の態度稍や變徵を呈し井上伯の一時歸國中七月六日朴泳孝は突然免官せられしのみならず尙又亂治の詔勅出でしと聞き倉遑日本に走る。既にして日本は子爵三浦梧樓を京城駐在公使に任じ井上伯に代らしむ。

井上伯の京城を去るや王妃の政權に干與する事舊に異ならず九月一日を以て就任せる三浦公使は憤慨止まず公使館書記官杉村濬、朝鮮政府顧問岡本柳之助等と共に朝鮮の政治を刷振せんとす。而して大院君も亦此事に干與す。一〇月七日朝鮮政府訓練隊を解散せんとす訓練隊は前年改革後の編成に係り日本士官の教育を受けしものなり。茲に於て斷然事を起すに決し翌日即ち明治二八年一〇月八日四一八九午前二時大院君訓練隊の護衛を受けて孔德里の邸を發し京城守備日本兵の援を得侍衛隊を驅逐して入闕す。此機に乗じて人あり後宮に闖入して王妃を坤寧殿に弒す時に午前六時なり。大院君は敢て親ら政權を掌裡に收むる事を爲さず其長子李載冕を宮内府大臣たらしめしのみ國王々妃の事を詳にせず二日の後之

を廢して庶人となす。此詳報の日本に達するや東京政府は大に驚き京城駐劄公使を更迭して小村壽太郎をして三浦子に代らしめ且つ井上伯をして同月三十一日を以て復た京城に入らしむ。然れども朝鮮の排日本思想は俄然として勃興し殊に露國公使ウエーベルの之を利用せんとするあり。井上伯は其思想の未だ表面事實として現はれざるに先ち滯留二週日にして歸國せしが間もなく一月二六日朝鮮國王は王妃の位を復し越えて二日即ち一月二八日舊侍衛隊の暴動あり。蓋し事變以後訓練隊を以て親衛隊となししかば舊侍衛隊は之を怨み此舉によりて現政府を顛覆せんとせるなり。然れども機未だ熟せず全く失敗す。既にして朝鮮も亦翌明治二九年西紀一八九六一月一日(二月一七日)より太陽曆を用ふる事となり且つ新年號を建てて建陽と定め又斷髮の令を下す。而も反動の勢は停止する所を知らず一月中春川地方の人民兵を執て政府に抵抗し京城鎮衛隊の大半之が鎮撫に向ふ。露國公使ウエーベル、グーデターを行ひて權勢を占むるの機至れりとなし。二月一日二百七名の水兵に入京を命じ翌一日國王及び世子を公使館に迎ふ。當時内閣を組織せる金宏集等は日本黨と目せられしより直ちに其任を解かれ且つ金宏

集をはじめ魚允中、金允植、鄭乘夏等の名士は皆二月八日事變の首謀と認められ屠殺せらる。

是より朝鮮に於ける日本の勢力日一日と衰運に向ひ之に反して露國公使ウエーベル及び朝鮮政府顧問米人リゼンドル、ニンステッド等の意見は一として行はれざるはなし。かくて米人モースは此年四月雲山金礦の探掘權を七月京仁鐵道の敷設權を得、佛人グロイヨイは九月京義鐵道敷設權を露人ブソノは同九日咸鏡道茂山地方並に江原道鬱陵島に於ける木材伐採權を得たり。京仁鐵道敷設權は朝鮮政府が日清開戦の初日本に豫約せる所にして鬱陵島の木材は當時日本人の伐採せる所なり。然れども如何に露國をして傍若無人の態度に出でしめんとするも亦全く朝鮮に於ける日本の利害を等閑に付する能はず。此年五月一四日露國公使ウエーベルは京城に於て日本公使小村壽太郎と四箇條の覺書を交換し國王に還宮を忠告し日本壯士を取締り政治の寛仁を勸告す可きを約し且つ日本の既に管理せる京釜電線の保護隊並に日露兩國各居留地守備隊の兵數を定む。其後六月九日露帝戴冠式參列の爲同國に赴ける侯爵山縣有朋は莫斯科に於て露國外務大臣公爵

パノフと四箇條の議定書に調印す。是即ち第一回の日露協商にして兩國協同して朝鮮政府に財政改革を勸告し其外債募集の際には兩國の合意を以て之を援助す可き事、軍隊及び警察の創設維持を朝鮮政府に一任す可き事、日本は京釜電信の管理を繼續し露國は其國境より京城に至るの電線を架設し得可き事等を規定す。此第一回の日露協商が東京に於て公表されんとするに當り明治三〇年^{光武}二月二〇日露國公使は國王の還宮を諾す。然れども國王の還宮せるは景福宮におらずして露國の公使館に隣接せる慶運宮なり。此年久しく京城に駐在せるウエーベル去り新任露國公使スピール九月二日を以て京城に入る。新公使スピールは其威迫脅嚇を朝鮮政府に加ふる事遂にウエーベルの上に出で日ならずして露國士官備聘の事を承諾せしめ一月五日には遂に外部大臣趙秉世をして露韓合同條約に調印せしむ。此條約は八箇條より成り露人アレキシープを以て大韓度支部總顧問官兼海關總辦に任じ韓國の財政權を擧げて露人の掌裡に歸せんとす。此年八月朝鮮國王は逆臣の定めたるものなりとて先に一世一元の制を定めしにも拘らず建陽の年號を廢して光武と改元せしが一〇月一二日更に皇帝即位式を行ひ且つ國

號を大韓と改めしなり。故に名義上大韓皇帝の格式は高まりしが如しと雖も露國の勢力は事實に於ては韓國の主權に干渉するの端を發けりと云ふ可し。然れども露國公使の強硬政略は漸く朝鮮志士の厭ふ所となり殊に其總稅務司英人ブラウンを排斥せんとして失敗せるより排露の感情益高まり來る。而も露國は釜山港絶影島に炭庫を設置せんとして韓廷に嚴談を試み明治三一年^{光武}三月上旬に於ける漢陽の政界は風雲頗る變調を呈せり。然るに此月一七日に至り露國公使は韓廷の通牒を承認し之と同時に露國より派遣せる教官顧問官等は一齊に辭職し大に讓歩する所あり。

蓋し前項に記述せる外なほ露國は朝鮮政府をして日本に三百萬圓の償金を還付せしむる等頗る第一回の日露協商を蹂躪するの嫌ありしが恰も此頃^{光武}に當り露國は旅順大連租借の事より英と衝突しし際なるを以て日本の英國と同盟を約するに至らん事を恐れ遂に斷然韓國に於て此讓歩を行ふに至りしなり。次で此年四月二五日東京駐在露國公使男爵ローゼンは日本外務大臣男爵西德二郎と議定書三條を協定す。是即ち第二回の日露協商にして韓國の主權及び完全なる獨立を確認

し其練兵教官、財務顧問官の任命は必ず兩國の協定を経可きを定め且つ露國の日、韓兩國商工業の發達を防碍せざる可き事を約せしものなり。此月京城駐在露國公使も亦更迭しスビール去てマチュートン來るマチュートンは温良の人にして此年一〇月露國全盛時代に權勢を振ひし金鴻陸の死刑に處せられし際の如きも敢て抗議を試みざりしと云ふ。韓國政府は九月八日漸くにして日本人に京釜鐵道敷設權を許可せしが京仁鐵道敷設權は日本人夙に之を米人モリスより譲り受け明治三二年^{光武}九月一八日其一部なる仁川、鷺梁津間約二十二哩は開通し現今既に全線落成す。京義鐵道は佛人期限内に起工せざりしより韓廷更に其敷設を國內用達會社に許可し其權利を外國人に譲與するを禁ず。韓國は又明治三〇年一〇月一日より全羅道木浦と平安道甌南浦、鎮南浦とを新開港せしが翌年五月三〇日更に各交際國に通牒するに全羅道群山、慶尙道馬山浦、咸鏡道城津を撰定して開港場となし平安道平壤市を開市場となせるを以てす。要するに第二日露協商締結以後日本は韓國に於て稍經濟上の利益を増進するを得たり。然るに明治三二年一月京城駐劄露國公使の更迭あり曾て代理公使として北京に

於て敏腕を振ひしバゾロフ韓國に赴任す。是より露國の外交再び面目を更め新任公使來着の後未だ幾ならずして露人伯爵ゲーゼツングの爲に捕鯨の基地として咸鏡江原慶尙三道中に延長七百尺廣袤三百五十尺以内の地所三箇處を得たり。然れども未だ之によりて以て旅順口、浦鹽斯德間の海上連絡を安固ならしむるに足らず。故にバゾロフ公使は明治三三年^{光武}三月三〇日韓國政府と二箇の條約を締結し其第一に於ては韓國は露國に新開港場なる馬山浦に於て居留地を距る三哩以内の地に露國東亞艦隊の爲めに石炭貯蓄所及び海軍病院各一箇處を設置するを許可し其第二に於ては露國は韓國に向て決して巨濟島及び其の對岸の陸地並に附近の諸島の租借を要求せざる可きを約し韓國は露國に向て同地域を他國に租與せざる可きを約す。而してバゾロフ公使は馬山浦の租借地を以て露國東亞艦隊の冬期繫留所とす可きを韓國政府に向て明言せりと云ふ。初め露國は日本人の已に馬山に於て買收せる地を以てバゾロフ公使が豫め選定せる地なりと稱し強て之を得んとせるより日露兩國間に外交上の紛議を起さんとせしが其後露國は一步を譲り別に栗九味と稱する地域を租借せるなり。素より日本も亦明治二九年

し其練兵教官財務顧問官の任命は必ず兩國の協定を経可きを定め且つ露國の日韓兩國商工業の發達を防碍せざる可き事を約せしものなり此月京城駐在露國公使も亦更迭しスピール去てマチュリーニ來るマチュリーニは溫良の人にして此年一〇月露國全盛時代に權勢を振ひし金鴻陸の死刑に處せられし際の如きも敢て抗議を試みざりしと云ふ韓國政府は九月八日漸くにして日本人に京釜鐵道敷設權を許可せしが京仁鐵道敷設權は日本人夙に之を米人モリスより譲り受け明治三二年^{光武}三月九月一八日其一部なる仁川鷲梁津間約二十二哩は開通し現今既に全線落成す京義鐵道は佛人期限内に起工せざりしより韓廷更に其敷設を國內用達會社に許可し其權利を外國人に讓與するを禁ず韓國は又明治三〇年一〇月一日より全羅道木浦と平安道甑南浦鎮南浦とを新開港せしが翌年五月三〇日更に各交際國に通牒するに全羅道群山慶尙道馬山浦咸鏡道城津を撰定して開港場となし平安道平壤市を開市場となせるを以てす要するに第二日露協商締結以後日本は韓國に於て稍經濟上の利益を増進するを得たり然るに明治三二年一月京城駐劄露國公使の更迭あり曾て代理公使として北京に

於て敏腕を振ひしバゾフ^{光武}韓國に赴任す是より露國の外交再び面目を更め新任公使來着の後未だ幾ならずして露人伯爵ゲーゼリングの爲に捕鯨の基地として咸鏡江原慶尙三道中に延長七百尺廣袤三百五十尺以内の地所三箇處を得たり然れども未だ之によりて以て旅順口浦鹽斯德間の海上連絡を安固ならしむるに足らず故にバゾフ公使は明治三三年^{光武}三月三〇日韓國政府と二箇の條約を締結し其第一に於ては韓國は露國に新開港場なる馬山浦に於て居留地を距る三哩以内の地に露國東亞艦隊の爲めに石炭貯蓄所及び海軍病院各一箇處を設置するを許可し其第二に於ては露國は韓國に向て決して巨濟島及び其の對岸の陸地並に附近の諸島の租借を要求せざる可きを約し韓國は露國に向て同地域を他國に租與せざる可きを約す而してバゾフ公使は馬山浦の租借地を以て露國東亞艦隊の冬期繫留所とす可きを韓國政府に向て明言せりと云ふ初め露國は日本人の已に馬山に於て買収せる地を以てバゾフ公使が豫め選定せる地なりと稱し強て之を得んとせるより日露兩國間に外交上の紛議を起さんとせしが其後露國は一步を譲り別に粟九味と稱する地域を租借せるなり素より日本も亦明治二九年

四八六一 一月三十一日の條約を以て慶尙道絶影島中黒石岩と稱する地に於て又明治
二四年^{四九一}八月二一日の條約を以て京畿道月尾島に於て各四千九百坪の地を
租借し其地に炭庫を設くと雖も露國をして韓國半島上殊に其南端に於てかかる
根據地を得せしむるは其利益を尊重する所以にわらず故に露國に向て抗議する
所あり翌年四月中旬露兵栗九味を撤退す因に記す現代紀の半島史上に横行濶歩
せる大院君は明治三十一年二月二二日を以て薨す時に年七十九歳なり。

第六節 日清戰役後日本の地位

日清戰役後日本の第一に力を用るしは新領土臺灣の平定事業なり抑も臺灣は下
の關係約に於て日本の領土となりしも當時未だ日本軍が實際之を占領せるにあ
らず故に日本政府は芝罘に於て同條約批准交換成るの後二日即ち明治二八年<sup>四
九一</sup>五月一〇日を以て海軍大將子爵樺山資紀を臺灣總督に任じ且つ金州半島に
駐屯中の近衛師團に命じて總督を援けて臺灣を收めしむ近衛師團長は陸軍中將
能久親王北白川宮なり時に臺灣巡撫唐景崧^{タウケンキウ}は提督劉永福^{リウユンフ}と相謀り五月二六日臺

北に於て共和政府組織の式を舉げ飽くまで日本軍に抵抗す故に樺山總督は六月
二日基隆(鷄籠)の沖に於て横濱丸の甲板上に清國全權李經芳^{リキョウホウ}と臺灣授受の公文を
交換す而して是より先五月二九日日本軍は既に三貂角に上陸し行敵兵を破り六
月三日攻めて基隆の諸砲臺を抜く唐景崧事の爲す可らざるを見て倉逸支那大陸
に遁れ日本軍は追撃して六月六日臺北を占領す茲に於て樺山總督は同月一七日
を以て臺灣始政の祝典を舉げ近衛師團長は兵を南に出し六月二二日新竹縣を占
領す此時に至るまで近衛師團の臺灣にあるものは一旅團に過ぎざりしが六月中
旬他の一旅團も旅順口を發して基隆に着す初め此旅團は海路南征臺南府に據れ
る劉永福を征伐するの計畫なりしが其兵力尠る可らざるを知るに及び更に第二
師團をして臺灣に向はしむる事となり近衛師團は暫く臺北附近土兵の掃蕩に従
事す名は土兵の掃蕩と稱するも大姑陷附近に於ては數激戦を見たり既にして近
衛師團長は臺北を發して八月三日新竹縣に入り陸軍少將河村景明同山根信成の
指揮せる二旅團の兵を以て南進し同一四日苗栗縣を同二五日臺灣縣を同二八日
彰化縣を奪ひ臺灣北部全く戡定す彰化縣は會て臺灣府治を置きし地なり。

此月二〇日日本政府は更に陸軍中將子爵高島綱之助を臺灣副總督となし南進軍司令の任に當らしむ。近衛師團は一〇月九日を以て嘉義縣を陥れしが恰も此前日を以て高島中將は悉く第二師團の兵員を澎湖島に集めて軍議を決す。其結果陸軍少將貞愛親王伏見宮の指揮せる旅團は一〇月一〇日を以て布袋嘴附近に上陸を開始し次で高島中將も同地より上陸して臺南府に向て南進し第二師團の本隊は一一日枋寮附近に上陸して北進す。時の第二師團長は陸軍中將男爵乃木希典なり。かくて鳳山縣と打狗の砲臺とは第二師團と常備艦隊との攻撃を受けて等しく一五日を以て陥りしかば劉永福は三方より日本軍の前進するを見一九日に至りて安平より船に乗じて遁る。故に臺南府は一の抵抗を試むるものなく二一日を以て日本軍の有となり賊徒平定す。然れども臺灣の地風土病激しく近衛師團の如き其臺南に入るを得しは全數の三分一に過ぎず不幸にして能久親王も亦遂に一〇月二八日臺南の陣中に薨去す。其後臺灣に於ては土匪の猖獗を極むる事ありしが漸次に歸順し治績稍見る可きものあり而して日本政府は明治二八年四一七七月一九日臺灣海峡自由航行の認諾と臺灣及澎湖列島の永久領有に就きて宣言を

公にし又同年八月七日外務大臣侯爵西園寺公望をして西班牙公使カルウオと協議せしめパシフィック海峡の航行し得可き海面の中央を通過する所の緯度並行線を以て兩國版圖の境界線と爲す。日本は先に明治二四年を以て小笠原島の西南に位せる火山列島即ち南北、中三硫黃島を占領せしがその後明治三一年更に東南に當れるマーカー島を占領し南鳥島と命名す。又この境界線の北にあり。此臺灣平定の事業よりも更に一層重大なるは條約改正の事業なり而して其成功の緒に就きしは實に日清戰役前の事なり。日本は明治の初年より諸般の制度を改革し遂に明治二二年四一八の紀元節を以て帝國憲法を發布し翌年一月二十九日帝國議會の開院式を行ふに至りしも其歐米諸國との條約にして對等なるを得ざれば未だ以て其伍伴に入る能はず。故に第一章第六節に叙述せるが如く夙に條約の改正を圖りしが常に成功せず。井上馨の外務卿となるに及び明治一五年四一八二月より東京駐在各國公使と豫備會議を開きて一の條約改正案を作り拮据數年先づ法權を收むるの端緒として暫く外人を日本の裁判所に用ゐんとせしが痛く世論の反對を招き明治二〇年四一八七月に至りて辭職す。次で伯爵大隈重信も亦

外務大臣となりて此事業を成功せんとせしが其案井上案と大差なきより爲に朝野の攻撃を買ひ明治二二年一〇月一八日暴漢に要撃せられ條約改正復蹉跌す故に明治二五年^{四九二}陸奥宗光の外務大臣となるや斷然井上案を棄てて純然たる對等條約案を草し翌年七月五日閣議を經し後先づ之を以て英國政府に交渉するに決し殊に獨逸駐劄子爵青木公使をして英國公使を兼勤し其事に當らしむかくて明治二七年^{四九四}七月一六日に至りて始めて現行日英間通商航海條約の調印成る。陸奥外務大臣功を以て子爵に叙せらる。日米日伊日秘日露日丁日獨日瑞諸日白日佛日蘭日瑞日西日葡日埃の諸條約は漸を以て改訂せられ又獨佛の法典に基きて制定せる民法商法訴訟法は日本全國に施行されかくて新條約は明治三二年^{四九一}七月一七日(日佛條約のみは八月四日)より其實施を視るに至れり。茲に於てか日本の稅權は未だ完全ならずと雖も法權に於ては外交上又遺憾なきを得るに至れり。

尤も是より先日本は明治二一年^{四八八}一月三〇日華盛頓に於て墨西哥共和國と對等條約を締結し明治二七年^{四九四}日本布哇兩國は互に領事裁判權を撤去し

内地を開放せしと雖も這般の邦國との對等條約は未だ以て日本の價值を高むる能はず。日本が歐米文明國の伍伴に入りしは實に上述せるが如く明治三二年以後の事なり。日清の新條約は明治二九年^{四九六}七月二一日北京に於て調印されしが日本の地位高まると共に南米の伯刺西爾共和國は明治二八年^{四九一}一月五日巴里に於て南亞の暹羅は明治三一年^{四九八}二月二五日盤谷に於て東歐の希臘は明治三二年^{四九一}六月一日を以て新に日本と條約を締結す。且又日本は日清戰役後海陸軍の大擴張を行ひしかば頗る東亞に於て重要な位置を占め其人種を異にし其宗教を異にせるにも拘らず國際社會に入りて歐米諸大國と顔顔相下らざるに至れり。是西紀一九〇〇年の北清事變の最もよく證明せる處敢て讀者の注意を乞ふに及ばず。然れども一言讀者の注意を喚起せざる可らざるは日本の歐米諸國に對する態度如何即ち是なり。西化東漸の形勢は本書の全力を注ぎて叙述せる處にして而して日本は既に有形的事物に於ては歐米の長處を採用するに汲々たりと雖も無形的事物に於ては果して其決心ありや如何無形的事物と云ふは單に知識をのみ云ふにあらず殊に其道徳を指して呼べるなり。如何に日本にして泰西

の文物を輸入すと雖も其精神を輸入せずんば新制度の活用は得て望む可らず彼の西化東漸の大勢に逆らひ排外思想を養成するに努むるが如きは折角進歩せる日本をして再び退歩せしめ結局歐米諸國の下風に立たしめんとするものなり東邦近世の歴史を編みて日本の地位の支那、韓、暹羅等と大に異れるを喜ぶと共に得意の極日本をして知らず、維新當初開國の國是を忘却せしめんとするの傾向あるを思ひ憂慮に堪へず一言する事爾り。

東邦近世史下卷終

附錄第一

和漢洋對曆表 三正綜覽抄出

安政 元 四	一八五四 正 小 二 辛	一八五三 正 大 午 丙	一八五二 正 大 午 壬	一八五一 正 大 午 戊	一八五〇 正 大 午 甲
成豐 元 四	二一 辛 二 大 三 午 庚	二〇 辛 二 小 三 子 丙	一九 壬 二 大 三 子 壬	一八 戊 二 大 三 子 戊	一七 甲 二 小 三 子 甲
	二五 庚 三 小 四 子 庚	二四 庚 三 小 四 子 庚	二三 壬 三 大 四 子 壬	二二 戊 三 小 四 子 戊	二一 甲 三 大 四 子 甲
	二九 己 四 大 五 小 己	二八 己 四 大 五 小 己	二七 辛 四 大 五 小 辛	二六 丁 五 小 六 子 丁	二五 癸 五 小 六 子 癸
	三〇 己 六 大 七 辰 己	二九 乙 六 大 七 辰 乙	二八 辛 六 大 七 辰 辛	二七 丁 六 小 七 辰 丁	二六 癸 六 大 七 辰 癸
	三五 庚 七 大 八 戌 庚	三四 甲 七 小 八 戌 甲	三三 庚 七 小 八 戌 庚	三二 乙 七 大 八 戌 乙	三一 辛 七 小 八 戌 辛
	四〇 庚 八 大 九 辰 庚	三九 癸 八 大 九 辰 癸	三八 己 八 小 九 辰 己	三七 乙 八 小 九 辰 乙	三六 辛 八 大 九 辰 辛
	四四 丁 九 大 一〇 酉 丁	四三 癸 九 小 一〇 酉 癸	四二 己 九 小 一〇 酉 己	四一 乙 九 大 一〇 酉 乙	四〇 辛 九 大 一〇 酉 辛
	四九 小 一〇 大 一一 卯 丁	四八 癸 一〇 大 一一 卯 癸	四七 己 一〇 大 一一 卯 己	四六 乙 一〇 大 一一 卯 乙	四五 辛 一〇 大 一一 卯 辛
	五三 小 一四 大 一五 中 丁	五二 癸 一四 大 一五 中 癸	五一 己 一四 大 一五 中 己	五〇 乙 一四 大 一五 中 乙	四九 辛 一四 大 一五 中 辛
	五八 小 一八 大 一九 中 丁	五七 癸 一八 大 一九 中 癸	五六 己 一八 大 一九 中 己	五五 乙 一八 大 一九 中 乙	五四 辛 一八 大 一九 中 辛

十一、廿七改元

附錄第一 和漢洋對曆表

附録第一 和漢洋對曆表

一八九七	明治三〇	二月三	三十四	二五	二五	三二	三〇	七	二九	八	二八	九	二六	二〇	二六	二	二	二	二	二
光緒二三	正小	卯辛	二大	申庚	三大	寅庚	四小	申庚	五大	丑己	六小	七小	八大	壬戌	九小	十大	十一大	十二大	十三大	十四大
一八九八	明治三一	二月二	三十三	二四	二四	三一	二九	八	二八	七	二七	八	二六	二〇	二六	二	二	二	二	二
光緒二四	正大	乙酉	二小	卯乙	三大	寅庚	四小	申庚	五大	丑己	六小	七小	八大	壬戌	九小	十大	十一大	十二大	十三大	十四大
一八九九	明治三二	二月一	三十二	二三	二三	三〇	二八	七	二七	六	二六	七	二五	一九	二五	二	二	二	二	二
光緒二五	正大	己酉	二小	卯乙	三大	寅庚	四小	申庚	五大	丑己	六小	七小	八大	壬戌	九小	十大	十一大	十二大	十三大	十四大
一九〇〇	明治三三	二月	三十一	二二	二二	二九	二七	六	二六	五	二五	六	二四	一九	二四	二	二	二	二	二
光緒二六	正小	甲辰	二大	酉癸	三大	申庚	四小	寅庚	五大	丑己	六小	七小	八大	壬戌	九小	十大	十一大	十二大	十三大	十四大

備考 此表は例へば光緒二六年正月は小にして其元日の干支は甲辰に當り而して四組一九〇〇年即ち明治三三年の一月三十一日なりとの旨を示せるなり他は之によりて類推す可し。

附録第二

日支葡西英蘭佛露獨米君主年表

西洋紀年	日本皇帝 (徳川將軍)	支那	葡萄牙	西班牙	英吉利	和蘭	佛蘭西 (共和國)	露西亞	獨逸	米國
一八五三	(孝) 明治	文宗	ヘドロ五	イサベル二	キクトリア	キルレム三	ナポレオン三	ニコリス一	獨逸同盟	ピア
一八五四	(家) 慶	統	ザコナルカ	イサベル二	キクトリア	キルレム三	ナポレオン三	ニコリス一	獨逸同盟	ピア
一八五五	(家) 定									
一八五七	(家) 茂									
一八五八	(家) 茂									
一八六一			ルイス一							
一八六二		種								
一八六六										
一八六七	(今) 上									
一八六八	(將軍) 政權									
一八六九										
一八七〇										

附録第二 日支葡西英蘭佛露獨米君主年表

西洋紀年	日本皇帝	支那	葡萄牙	西班牙	英吉利	和蘭	佛蘭西	露西亞	獨逸	米國
一八七一							マクマホン		(帝國)キルヘルム一	
一八七三										
一八七五	今	帝		共和政 アルフォンソ二 ルボン統						
一八七九										
一八八一							アレクサン ドル三			
一八八五										
一八八六				アルフォン ソ一三						
一八八七										
一八八八										
一八八九										
一八九〇										
一八九三										
一八九四										
一八九五										
一八九七										
一八九九										

附錄第二 日支葡西英蘭佛露獨米君主年表

附錄第三

咸豐同治年間清國地方大官交迭表 其一總督

咸豐元	二	三	四	五
道光三〇				
訥爾經額琦				
善徐澤醇	三三。同。上	三三。同。上	三三。同。上	三三。同。上
程希來	二二。同。上	二二。同。上	二二。同。上	二二。同。上
陸建瀛				
裕泰				
徐廣綰				
劉韻阿				

附錄第三 咸豐同治年間清國地方大官交迭表 其一總督

一八七九	一八七五	一八七一	一八八五	一八八七	一八八九	一八九〇	一八九三	一八九四	一八九五	一八九七	一八九九
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那	支那
今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝	今帝
共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政
カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス	カルロス
アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ	アルフォンソ
共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政	共共和政
ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ	ナセルヘルミ
カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール	カシミール
マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン	マクマオン
アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン	アレクサン
フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド	フレッド
ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ	ヘイズ
マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン	マッキン

附録第二 日支葡西英蘭佛露獨米君主年表

附録第三

咸豐同治年間清國地方大官交迭表 其一總督

直隸	陝甘	四川	雲貴	兩江	湖廣	兩廣	閩浙
道光三〇	咸豐元	咸豐元	咸豐元	咸豐元	咸豐元	咸豐元	咸豐元
訥爾經額琦	善徐澤醇	程番采	陸建瀛	裕泰	徐廣綽	劉韻阿	
同治十〇	同治十〇	同治十〇	同治十〇	同治十〇	同治十〇	同治十〇	
正二	正二	正二	正二	正二	正二	正二	
同	同	同	同	同	同	同	
上	上	上	上	上	上	上	
九	九	九	九	九	九	九	
三	三	三	三	三	三	三	
六	六	六	六	六	六	六	
九	九	九	九	九	九	九	
五	五	五	五	五	五	五	
四	四	四	四	四	四	四	
三	三	三	三	三	三	三	
二	二	二	二	二	二	二	
一	一	一	一	一	一	一	
五	五	五	五	五	五	五	
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	
王	王	王	王	王	王	王	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	

附録第三

咸豐同治年間清國地方大官交迭表 其一總督

附録第三 咸豐同治年間清國地方大官交迭表 其一 總督 六七〇

		直隸	陝	甘	四	川	雲	貴	兩	江	湖	廣	兩	廣	閩	浙
同治 一 二							八三。 (半職英)	正六。李宗羲								
一 三								三三。劉坤一					九、八。英翰			

備考 ○姓名の上に△を加へ若くは括弧を以て特に表出せしは署任の意なり。○同上とあるは署任の實叙されしを示す。○姓名の下に十の符號あるは病死を示し◎の符號あるは戦死若くは變死を示す。

上卷正誤

四二六頁一四行 モンチニリチン 號を モンチニル 號と改む。

四五六頁二行 提督鮑超約を提督鮑超約と、

巡撫魏典 を 在籍巡撫魏典 と、

湖南巡撫張基 を 湖南巡撫張基 と改む。

四五七頁四行 前提督向榮 を 提督向榮 と改む。

同 頁五行 大學士琦善 を 前大學士琦善 と改む。

一四二頁六行 皇帝 を ツァール と改む。

同 頁二行

同 頁二行 位に即くの下に（以下假りに國王と譯す）の十字を加へ、以下帝を王と改む。

以下帝を王と改む。

一四九頁一三行 血統 を 男統 と改む。

一四四行 王位に即しむの下に（ミハイ の母 ニア は即ち イラ

ン 四世の女なりしが爲り）の二十六字を加ふ

一七三頁八行 彼得の下に（彼得四紀二七二年初めて皇帝と稱す）の

十七字を加へ、

同 頁一〇行 の帝都 を 王城 と改む。

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
九三二	一三四	ナホレオン三世	ナホレオン三世	一三三	一四八	嚴樹森	嚴樹森
八二	五	肆劫掠俗するを	劫掠を肆にす故	一六六	二	チエルニヤヨフ	チエルニシヨフ
八三	三九八	以て捻子の名を	に捻子の俗稱を	二七〇	二	ペトロフスコフ	ペトロフスコフ
八四	四	會國茶	會國茶	二〇七	四	ゴルチャコフ	ゴルチャコフ
九四	三〇四九	キャンニング卿	キャンニング卿	三六五	三	回強	回強
九九	二六五	大沽	大沽	三六六	一	其言に助されし	其言に動され有
九九	三〇四	大沽	大沽	三八九	八	より	名なる西紀一八
一〇〇	二六五	花紗納	花紗納	四四四	五	翼宗	六九年の訓令を
一〇〇	二六五	花紗納	花紗納	四四五	六	掌握	下ししより
一〇〇	二六五	花紗納	花紗納	四四七	六	掌握	文祖
一〇〇	二六五	花紗納	花紗納	四四八	六	文録	文録
一〇〇	二六五	花紗納	花紗納	四九八	四	文録	文録

東邦近世史下卷正誤表

人名地名の位に意味を
替するものを改む

明治三十五年十二月五日印刷
 明治三十五年十二月八日發行

著作者兼
發行者

田中萃一郎
東京市芝區高輪臺町二十八番地

印刷者

中野鏜太郎
東京市京橋區木挽町九丁目三十二番地

著作權
登録済

印刷所

帝國印刷株式會社
東京市京橋區築地三丁目十五番地

エトD-33

東邦近世史

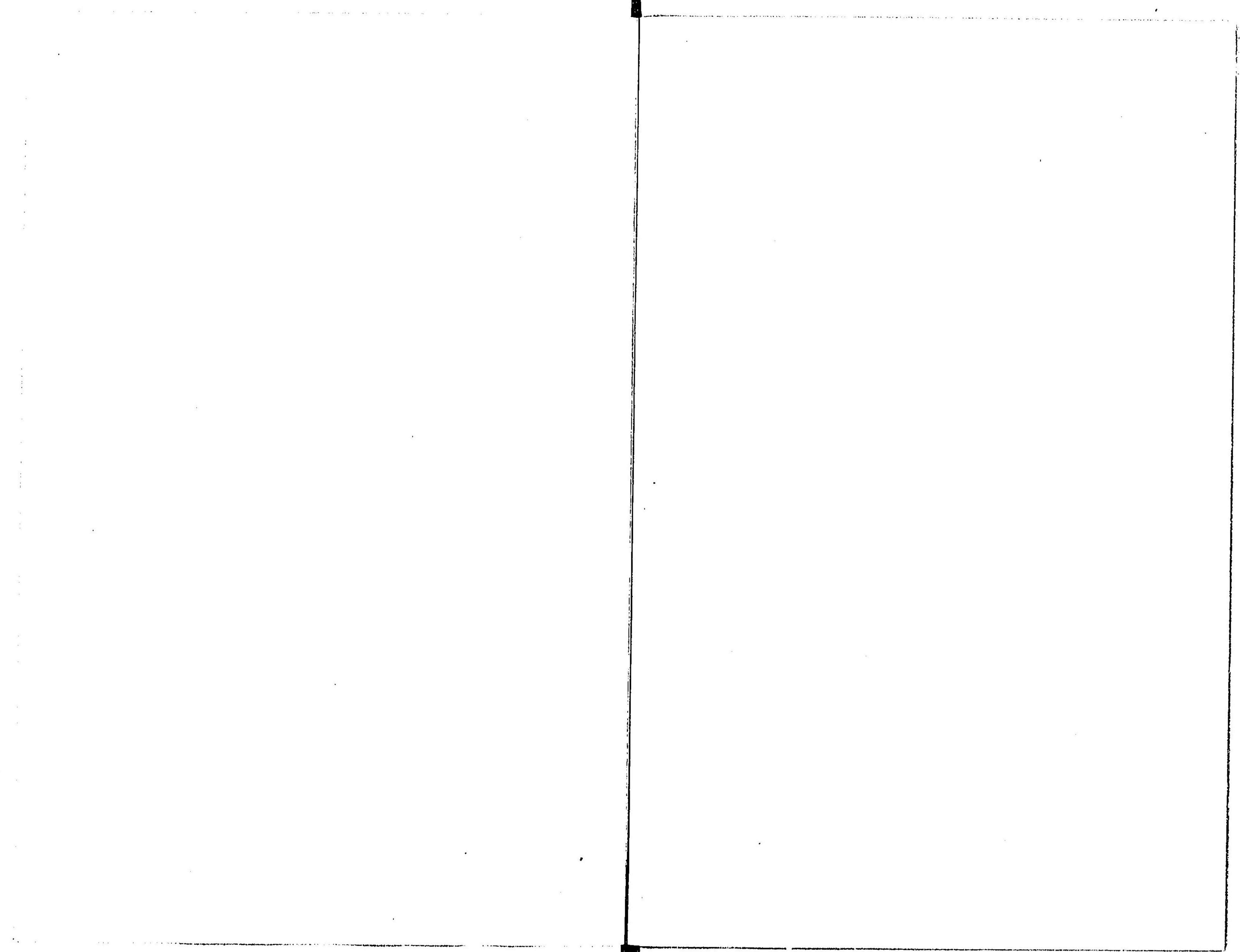
上卷 定價金壹圓
下卷 定價金壹圓七拾五錢

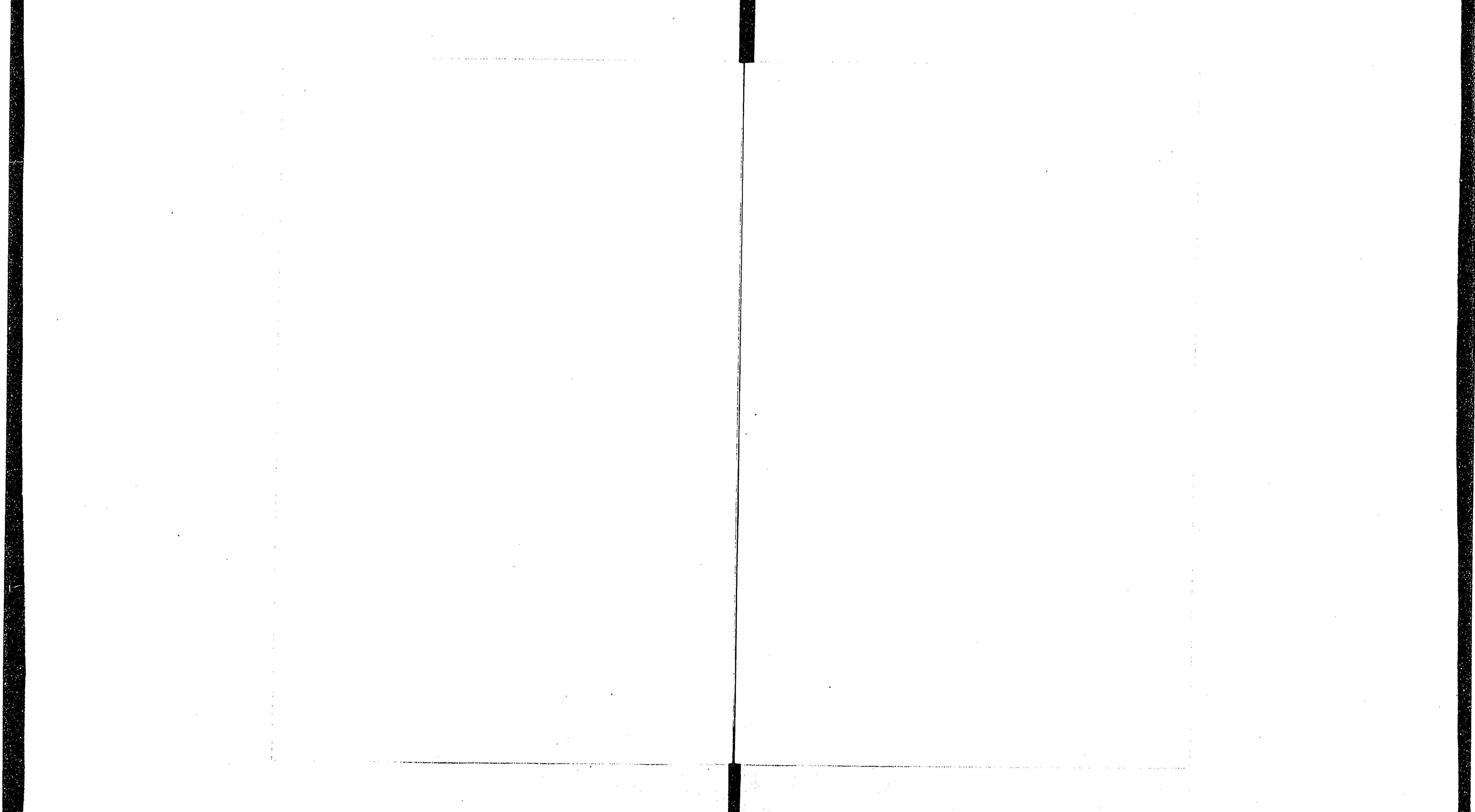
「新民叢報」所載飲水室主人の「東籍月旦」中に本書の上巻を評して左の如く云へり。以て其眞價を知る可し。

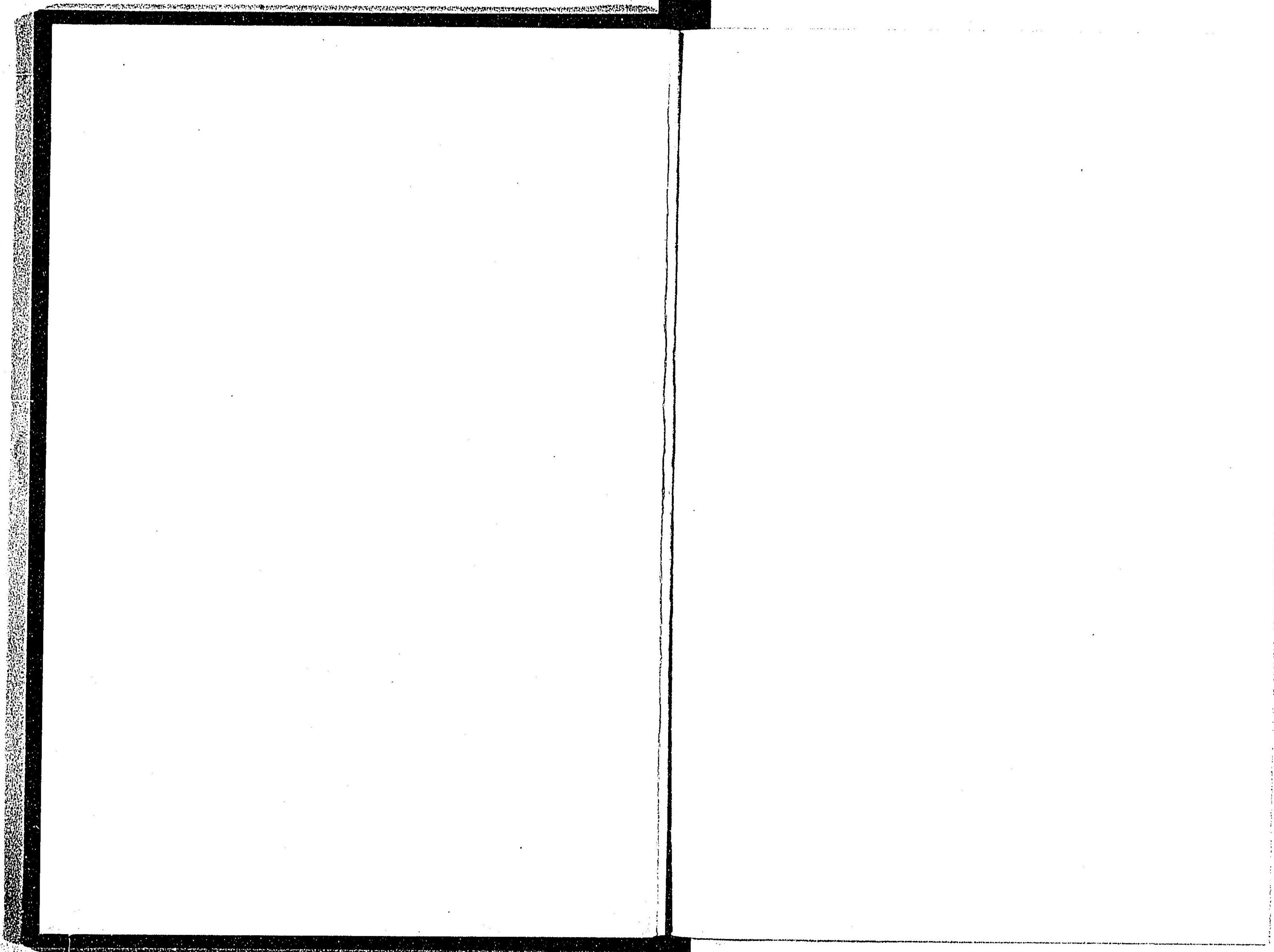
東洋之斷代史。合是書更無他本。此書凡分十章。

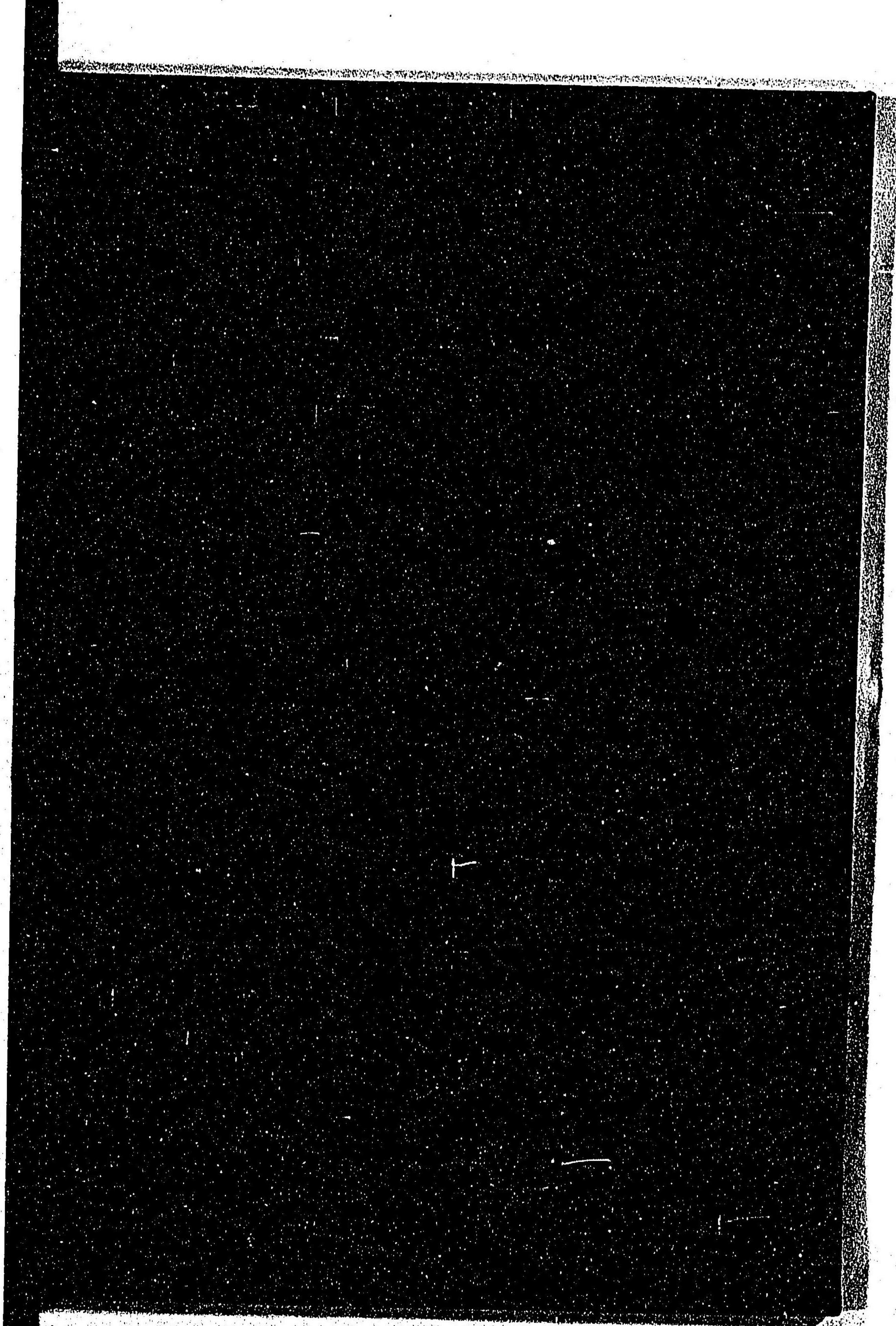
- 第一章。歐人通商之初期(拉丁民族)。
 - 第二章。滿洲之興起。
 - 第三章。歐人通商之第二期(條頓民族)。
 - 第四章。俄國東方侵略之初期。
 - 第五章。印度之蒙古帝國勃興及其瓦解。
 - 第六章。英人侵略印度。
 - 第七章。滿洲朝之經略西方。
 - 第八章。緬越諸國侵略之初期。並南洋諸島。
 - 第九章。中亞英俄衝突之初期。
 - 第十章。鴉片戰爭及洪楊之難。
- 其搜羅事實而述貫之。能發明東西民族權力消長之趨勢。蓋東洋史中最佳本也。

發賣所 東京市日本橋區通三丁目 丸善株式會社書店









۸۷

۳۳

(M)

